

農業生産共同化に関する覚え書

— ヤマギシズム社会の —

現代的意義 —

足立 恭一郎

一 「適応」の農業生産共同化論批判

— 課題と方法にかえて —

(一) 農業生産共同化論の再燃

「混沌」虚飾なき日本農業の実態——ジャーナリストとしての表現を用いれば、高度経済成長期以降の日本農業の姿は、多分、このように言い表わすことができるのであろう。そして、その実態を、

食糧自給率の低下、食糧不足下の生産過剰（アメリカの食糧の傘）、兼業化の深化、労働力の女性化・高齢化、後継者不足、改善されぬ零細経営、耕地利用率の低下、耕地

《ノート》 農業生産共同化に関する覚え書

潰廃、地力の減退、連作障害、農業汚染、畜産公害、「過疎化と混住化の深化による地域社会の変貌」、「人々の社会的連帯感の喪失とコミュニティの崩壊」、等々、これらが相互に複雑に絡み合い、解決の糸口が見出せぬままに、「混沌」の状況を更に深刻化させて今日に至っている

と、このように評論家的に記述することも、恐らくは可能であろう。⁽³⁾

とまれ、こうした混沌状況を背景にして「一九七五年前から地域農業の在り方、展開方向をめぐる議論が、ようやく活発になってきた」。そして、「農業経済学、農業経営学の分野の研究者们ばかりでなく、日本農業に関心を持ついろいろな分野の人々が、まさに百家争鳴というべき賑やかさで、それぞれの見解を示し、多くの農業関係誌も、この問題の特集を行い、議論の場を設けてきた」⁽⁴⁾（傍点―足立）。

言論界におけるこうした地域農業論の隆盛は、昭和五一年度「農業白書」にも反映された。もっとも、地域農業と密接に関連する農業生産の組織化については、かなり以前から、例えば、「規模拡大と生産の組織化」（昭和四五年度）、「自立経営の形成と農業の組織化」（昭和四六年度）という形で、既に「白書」において様々に取りあげられてきたが、永田恵十郎氏の指摘の如く、⁽⁶⁾地域農業なる用語が記述部分に登場するのは昭和四九年

度白書が最初であり、目次構成の中に節をおこして独立に記述されるのは五一年度白書が最初であった。⁽⁸⁾

「百家争鳴というべき」状況の中で、恐らく最もラディカルなものは「地域主義」の主張であろう。

玉野井芳郎氏は、地域主義を「地域に生きる生活者たちがその自然・歴史・風土を背景に、その地域社会または地域の共同体にたいして一体感をもち、経済的自立性をふまえて、みずからの政治的・行政的自律性と文化的独自性を追求することを行う⁽⁹⁾」と、このように定義する。

坂本慶一氏はこれを援用し、更に地域について若干の考察を加えた上で、先述の混迷状況からの脱出の糸口の一つを、「地域主義農業」の確立に見出そうとする。ここにいう「地域主義農業」とは、「地域の生態系を前提とした循環的、永続的農業生産システムの構築、ならびにそれに基づく農業経営と農産物流通・価格体系の再編成を意味する⁽¹⁰⁾」ものであり、その完遂には、現代工業化社会が強要する数量的合理主義を「生」の原理に基づく新しいパラダイムへ転換させるべきことが必須の条件として前提されている。⁽¹¹⁾

右の地域主義農業論が含意する要点（つまり、パラダイム転換）の検討は後に詳しく行うことにして（二―〔参照〕、本稿では以下、こうした地域主義農業論、地域複合農業論、あるいは

農業生産組織論、集団営農論、等々、今日様々に呼ばれているものを、「農業生産共同化論」として同一カテゴリーに一括して把握する。何故なら、「地域」といい、「集団」、「組織」という以上、そこには少なくとも二つ以上の行為（経営）主体の、何らかの共働の所作が言外に想定されているからである。

勿論、そうした所作の顕現のされ方は、行為主体の「共働」に対する認識水準（パラダイム転換の程度）、および彼（または彼女）を取り巻く環境としての当該地域の風土的個性、歴史的・社会的・経済的諸条件等の相違によって、多種多様に変異する。例えば、綿谷超夫氏は「本来の農業生産過程で生産要素――

労働力、労働手段、労働対象および耕地――の技術的結合が行なわれるにさいして、これを実現する『経営的容器』にどんな共同化の形態が組み入れられるかという点に、類型区分の視角を統一⁽¹²⁾して、昭和三〇年代中葉に第1表のような「変異」の類型区分を試みた。また、近年、農林水産省は農業生産組織を「複数（二戸以上）の農家が農業の生産過程における一部又は全部についての共同化に関する協定のもとに結合している生産集団並びに農業経営や農作業を組織的に受託する組織をいう⁽¹³⁾」（傍点―足立）と定義して、第2表のような類型区分を行っている。が、これらは共に形態上の差異となって顕現した共働の所作を分類したもの、つまり、農業生産共同化類型区分として

第1表 共同化の10類型とその特徴〔補欠〕

類 型	指 標	経営管理機能		労働力の編成		労働手段の所有または借入	労働対象の所有	耕地の借入または所有	参考の一生産物の帰属
		生産部門の全過程	特定生産部門の全過程	労働力の全戸出役	専従者中心				
(1) 共同作業型				○		○			
(2) 共同利用型				○		○			
(3) 共同施設による共同作業型				○		○			
(4) 組合請負作業型			○		○	○			
(5) 管理協定型			○		○	○			
(6) センター式団地共同型			○		○	○		○	
(7) 分割制共同農場型			○		○	○		○	
(8) 部分共同経営型			○		○	○		○	
(9) 部門共同経営型			○		○	○		○	
(10) 全面共同経営型		○	—	—	○	○	○	○	○

出所：鎌谷勉夫 [46], 16～17頁。

注 1. ○印は、これが付いている各指標において共同化集団がその主体になっていることを示す。もちろん範囲が全生産部門の全過程におよぶが、特定生産部門の全過程またはその部分過程に限られるかの違いはある。

2. センター式団地共同型における労働力の編成、労働手段の所有または借入の欄の○印は、センター（たとえば農協）で直営している部分過程に限る。なおこの類型の指標はかならずしも一定しない。

第2表 農業生産組織類型区分一覧表〔農林水産省〕

組織	大分類	中分類	小分類	分類番号	調査対象作物	
					昭和47	51
農業生産組織	共同利用組織 ①	属地的共同利用型 農業集落運営型 任意組合等運営型 特定グループ運営型		1	水 稲 果 樹 野 菜 施設園芸 養 蚕	全 作 目 (水稲 麦 果樹) 野菜(露地)施設園芸 養蚕 その他作物
				2		
				3		
				4		
	集団栽培組織 ②	裁 培 協 定 型 共 同 作 業 型 共 同 利 用 型 部 分 作 業 委 託 型		5	水 稲 野 菜	同 上
				6		
				7		
				8		
	受託組織 ③	農 業 経 営 受 託 (全面農作業の受託を含む)	農 協 型 農業生産法人 任 意 組 合 特 定 グ ル ー プ 農業サービス業	9	全 作 目 (作目別の区分なし)	同 左
				10		
				11		
				12		
		農 作 業 受 託	農 協 型 農業生産法人 任 意 組 合 特 定 グ ル ー プ 農業サービス業	13		
				14		
				15		
				16		
				17		
				18		
	畜産生産組織 ④	土地の共同利用組織 機械の共同利用組織 施設の共同利用組織 繁殖・育成センター		19	すべての 家畜を対象	同 左
				20		
				21		
				22		
協業経営組織	⑤	全 面 協 業 部 門 協 業		23	すべての 作目を対象	すべての作目を対象とするが、総数のみ調査した
				24		

出所：農林省統計情報部『農業生産組織調査報告書』（昭和51年7月調査）。

注：昭和47年調査では、協業経営を行っている部門数によって協業経営組織の中分類を1部門協業、2部門協業、3部門協業および多部門協業に分類した。

理解しても大過ない性格のものである。ただし、類型区分の方法そのものについては、問題がないわけではない。この点に關しては次節において検討される。

(三) 「適応」の農業生産共同化論

「適応」とは、本稿においては、(1) M・ウェーバーの価値自由 (Wertfreiheit 没価値性) の主張を是として、「どんな特定の倫理的立場、あるいは、規範的な判断からも独立し、何であるかの實在 (sein) を研究対象とし、何をすべきかの当為 (sollen) の問題は対象としない」とする立場に立ち、かつ、(2) 意識的、無意識的に現代工業化社会のパラダイム⁽¹⁵⁾ 数量的合理主義・効率主義・生産力主義に準拠し、更に、(3) その発想法において部分均衡論的であることを総称する、と定義される。その含意するところは次の通りである。

渡辺兵力氏は農業生産共同化の類型的把握を、「適応の共同化」および「発展の共同化」という二つの概念を用いて行わべきことを主張した。ここにいう「適応の共同化」とは、(イ) 人口変動、(ロ) 農業的自然条件の変動、(ハ) 農産物価格(市場条件)変動、(ニ) 農業生産諸関係の変化、等々、「個別的農業生産を成立せしめている諸与件が変り個別生産体の個々の力ではそれに適応し切れなくなったとき、いくつかの個別生産体が結びつく

ことによってそれに対処せんとした場合」に行われる共同化であり、「発展の共同化」とは、『与件への適応』を主目的とせず、むしろ逆に与件自体を改変し、新しい生産様式によって新しい生産力を形成しようというきわめて積極的な共同化」と定義される。

他方、宮原幸則氏もこの点に触れて、「いまのかたちにあらわれた共同のやり方で分類するよりは、共同化のうごきの底をながれる意識ないしは共同化の目標をさぐりだして、それによって分類をこころみる必要がある」と言及し、具体的に、個別経営補強強化型と大規模・集団営農指向型との二類型による分類を試みた。

渡辺・宮原両氏によって試みられた右のような農業生産共同化の類型区分は、組織を構成する農氏の「意識」に着目せんとした点においてユニークであり、本稿の問題意識にも共通する一面を有している。

ところが、従来支配的であった類型区分は、先の綿谷氏のそれに代表される如く(第1表参照)、かたちとして表面に現われた実態を、労働、労働手段、労働対象、経営管理機能、等々、生産要素の集団⁽¹⁹⁾への移行の程度によって機械的に分類せんとするものであった。われわれはこれを、「適応」の農業生産共同化論と呼ぶ。

つまり、「現状で必要なのは、共同化の静態的な現象面をありのまま概観するのにすぐ役立つような類型区分である」⁽²⁰⁾とする綿谷氏の主張の中に、まず、価値自由た然とする立場が表明されている。第二に、共同化は「技術革新に対応し、これを受容するための経営の「方式」⁽²¹⁾であり、与件変動に伴う個別経営の隘路を切り開くためのもの（手段）とする認識の仕方において、現代工業化社会のパラダイム＝生産力主義への盲目的準拠が指摘できる。そして第三に、共同ないし其働とは一つの価値観＝生き方の表明であらうと考えられるが、これを経営ないし経済という局限された部分において捉え、たとい潜在的にせよ、個別経営との比較において共同（其働）の利弊を秤量せんとする発想法を有する点で、部分均衡論的であると言いうことができる。何故なら、利弊の秤量は「他の事情にして一定ならば（ceteris paribus）」と、与件の不変性が仮定されなければ論理的に成り立ち得ぬものだからである。——価値自由、生産力主義、部分均衡論的発想のすべてを具備していることから、われわれはこれを「適応」の農業生産共同化論と呼ぶことができるのである。

「適応」の農業生産共同化論は、また、農林水産省の「農業生産組織類型区分一覽表」にも影響を及ぼしているが、ここではそれについては立ち入らない。

それでは、渡辺・宮原両氏の農業生産共同化論はどうであらうか。詳細に検討する時、阿氏のそれも所謂「生産力主義の伝統」から必ずしも無縁では有り得なかったことが知られる。

例えば渡辺氏の論文⁽⁴⁵⁾には、以下の如き主張が散見される。

曰く、「発展の共同化を持続的生産様式とするためには……いうまでもなくその前提的かつ目的的条件は、個別小経営よりも『高い生産力』を持つことと、より『大きい経営収益性』を確保するという二点である」（一〇九頁）。

曰く、「（共同経営が）農業生産力において個別経営に優越するために必要な条件は……(1)新技術の導入と、(2)新資本の獲得の二条件である。……そしてさらに農業生産力の高さと経営収益性の大きさとを合致せしめるものは、近代的な意味での自由・平等な生産関係の確立である」（一一〇頁）。

曰く、「個別経営を共同化することの利点は、別々では不足する自己資本を結集することによって有効なる投資単位とし得ること、さらに共同化によって労働の単位が増加し、一つの作業に集中的に労働力を使い得ること、の二点である」（一一一頁）。

曰く、「共同経営は個別経営よりも（同じ経営環境の下で）高い生産力ならびに収益性を持続的に実現・確保しな

ければならないのであるから、すべての問題を、『生産力の高揚』という観点から考えるべきだ。』（傍点）足立、一四頁。

曰く、「農業共同化は高い生産力發揮の手段であり、決して経営の目的ではない」（一四頁）。

すなわち、右の諸主張下に共通して存在する思想は生産力主義、つまり、坂本氏によって批判される現代工業化社会のパラダイムに準拠する性格のものであった。それ故に、

「ただ一言ここに指摘しておきたいことは、安定した共同経営における『人』は個別経営（このことは同時に個別的『家計』を基礎とする生活をも意味する）の『人』とはちがった性格の『人間類型』に属することを要求されるという点である。生産面の物的要素においても個別経営と共同経営とはかなり質的にちがったものをもたねばならないと同様に、『人』の面でも個人経営における『人』をそのまま共同経営の『人』として維持してゆこうとすることは正に論理矛盾である。共同経営が合理性をもって存続してゆくためには、『人』は『共同経営的人』にならなければならない。いい換えれば、物の面の共同化と人の面の共同化とが行なわれなければ、真の共同化は成立しないのである」（一一九頁）。

と、真の共同（共働）には新しい人間Ⅱ共同経営的人を必要とするところまで言及し得ておりながら、渡辺氏はこれを十分に展開し切れずに終わってしまったのである。

定義に忠実ではないが、渡辺・宮原両氏の所説も広義の「適応」の農業生産共同化論に含めておきたい。

その他、最近では生産組織の企業形態論的把握の試みがなされているが、これも「適応」の農業生産共同化論の範疇に含まれるべき性格のものであり、敷衍すれば、通常的に農業生産共同化論と呼ばれるものの圧倒的多数は、本稿にいうところの「適応」の農業生産共同化論に分類できる。

その理由ならびに「適応」の農業生産共同化論に対する批判的検討は、以下に続く教節においてなされる。

(三) ファウスティアン・マン・シンドルム

ファウスティアン・マン (Faustian man) とは、O・シムペングラー（一八八〇～一九三六年）の造語で、「留まることなく自己の欲望を実現し、永遠に満足することなく上へ上へと上昇を続ける闘争的人間」、つまり、「自我拡大と目標の無限追求の精神」⁽²⁵⁾を基調とするファウスティアン人間を意味する。これはまた、E・デュルケムによって批判された功利主義的個人主義に立脚する人間、と換言してもよい。シンドルム（症候群

syndrome) とは、「高頻度で併発して起る、一群の複雑な症状、または異常な行動」⁽²⁷⁾を意味する。

右に定義されるファウステイアン・マン・シンドロムについては、これまで数多くの人々によって様々に指摘されてきた。

例えば、坂本慶一氏は『日本農業の再生』において、まず、現代工業化社会のパラダイムを「数量的な生産力の追求と実現にある」、あるいは「工業化社会の価値体系のなかに組み込まれた人々が第一義的に求めているのは数量的価値であり、これが工業化社会の最も基本的な価値基準である。資本主義的工業化社会では、この価値は私的利潤の極大化として追求される。社会主義的工業化社会では、社会的余剰の極大化がめざされる」(一六頁)と、このように規定した上で、その弊害として、「工業化社会の価値体系が確立し、そのネットワークの密度が高くなるにつれて、やがて生物的存在としての人間の生存を脅やかし、その生物的本性を疎外し、その生命の充足感を剝奪するようになる。……公害の深刻化による直接的な『生』の腐蝕。ハードな機械体系が強制する人間の画一化と機械化の進行。人々の社会的連帯感の喪失とコミュニティの崩壊。工業化社会の情報システムによる人間の創造的、開拓者精神の剝奪。科学技術の脅威の増大と政治的専制への指向等々。工業化社会がかかえている社会的、人間的危機は枚挙にいとまがない」

(一七頁)と指摘する。

他方、ファウステイアン・マン・シンドロムは周知の「疎外論」としても展開できる。

曰く、「分業と私的所有があらわれる人間社会の一定の発展段階で、人々によって生産された諸対象は、疎外された労働の具体化としての物(商品)に転化し、人間活動の対象化は物化に転化し、社会的諸関係は、人と人との関係から物と物との関係(物的諸関係)に転化する。物化の諸条件においてのみ(対象化そのものの諸条件においてではなく)、人間の疎外、物の独立の主体への転化、人間の非人格化^{デペルソナライゼーション}がうまれる。商品生産の発展に応じて、物化と人間の疎外とはますます強化されてゆき、資本主義のもとでその頂点に達した」⁽²⁸⁾。

あるいは、「アノミー(anomie)Ⅱ疎外された欲求」として捉えることもできる。

曰く、「アノミーとは、まったく充足に達することのない、しかも主体の内発性からは切り離され、疎外された欲求の、構造化された無窮動」⁽²⁹⁾であり、それは工業化社会に支配的となりつつある価値Ⅱ「物質的幸福の神格化(apothéose de bien-être)」⁽³⁰⁾によってもたらされ、「焦燥」「苛立ち」、そしてくりかえされる欲求の狂奔の果ての『疲労』という、

強迫的な不安や欲求不満等の心理的狀態を帰結する。⁽³¹⁾

右に見たものはほんの一例だが、このように様々に診断されるシンドルムは、恐らくは現代工業化社会に厳として存在し、「人け制度・仕組み」の図式で相互に作用しあいながら、その病巣をますます拡大させていくのであろう。

この意味において、今日、まず問われるべきはファウスティアン・マンもしくは功利主義的個人主義、あるいは物質的幸福の神格化と様々に呼ばれる現代工業化社会のパラダイムそのものでなければならぬが、先に紹介した「適応」の農業生産共同化論は実証科学に価値自由たらんと欲するに急なあまり、この点に対する考察を完全にスキップさせるのである。⁽³²⁾——現代工業化社会のパラダイムに準拠する当然の結果、というべきかも知れない。

それ故に「適応」の農業生産共同化論は、また、化学化・工業化されすぎた今日の日本農業の在り方そのものの、批判的検討の視点をも同時に欠落させる。

元來、「農」とは、「農業・農村・農業者を包括するとともに、農業の本質である『生』の論理を意味し、……『生』は生存・生命・生活を包含する」⁽³³⁾、総体的な概念であった。しかし、現代工業化社会のパラダイムに呪縛されたファウスティアン・マン

たちは、「農」の姿を一変させた。

「しかし、それは……『資本』という不可視の怪物によって強制される已むに已まれぬ市場対応の形であった」と、ファウスティアン・マンたちは自己を弁護せんとするかも知れない。われわれはここに、ファウスティアン・マンに通底する「スーダラ節的思考（行動様式）」⁽³⁴⁾を観ることができ、この点については別の機会に考察することとし、差し当たりここでは、近代畜産業において支配的な「量産家畜（禽）」⁽³⁵⁾、⁽³⁶⁾「残酷物語」⁽³⁷⁾の機械化⁽³⁸⁾に対して批判的検討を加えておきたい。

残酷物語の実態については、R・ハリソン⁽³⁹⁾「10」および高松修氏⁽⁴⁰⁾に詳しい。

彼等はアニマル・マシーンを、日光、土、緑、空間等の生活権を剝奪され、「穀物→動物性蛋白質変換機械」として唯ひたすら効率よく穀物を肉、乳、卵に変換することだけが許される量産家畜（禽）類、と、このように定義する。具体的には、無窓鶏（畜）舎に飼養されるブロイラー・肉牛（日光と土と緑と空間の喪失）、ケージ飼いの採卵鶏（土と緑と空間の喪失）、濃厚飼料で舍飼される乳牛・肉牛（土と緑と空間とルーメン⁽⁴¹⁾第一胃の喪失）、「フタ箱」養豚（土と緑と空間の喪失）等々をその内容とする。

例えば、高松氏はエア・コンディショニングの効いた無窓鶏舎

企業養鶏の実態を、次のように報告している。

曰く、「①飼育者は、一人で二万羽以上の鶏を管理せざるを得ず、一羽一羽の健康などという目が届かず、鶏をはじめから健康に育てようなどとは考えず、無菌にして病気を防ぐとするが、それも徹底させることはできない。

②ブロイラーの場合は、飼料効率を最高にするために、暗い檻に生涯閉じこめて運動させない。採卵鶏には、逆に夜も点灯して卵を産ませる。彼らは羽ばたくこともできず、ストレスがたまって隣りの鶏をつきたくても、それも許されず、暗い巣箱で気を落ちつけて産卵することさえ許されない。歴史的に得てきた飼育条件は完全に無視されている。

③鶏は、自分の身動きできない囲いのなかで、四季の変化さえ奪われて育つ。△土▽から完全に隔離され、他の生物からも隔離されている。④飼育管理者は予防薬を徹底して投与し、病原菌の侵入を防ごうとする。⑤飼料は完全配合飼料であり、健康状態に応じた配慮の余地はまったくない。養鶏家は、中身に直接責任のもてない餌の運搬人になりすぎない」(六七頁)。

他方、R・ハリソンは一九六〇年代のイギリスの畜産業者たちのファウステイアン・マン振りを、「家畜との一体感は、かつての伝統的な農民を特徴づけるものであったが、今やそれは、

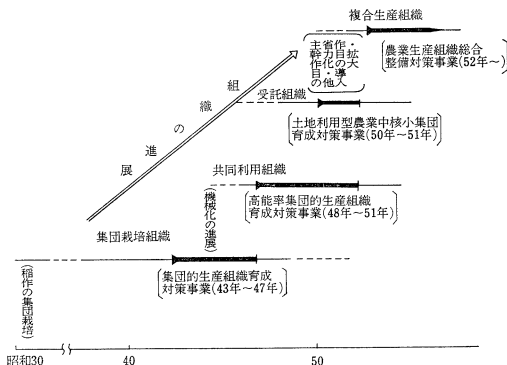
非経済的で感傷的なもの、と申し渡されているのである。工場式の農場にあつては、動物の生命はもっぱら利潤をめぐる回転する。動物は、エサを肉、つまり△売れる製品▽に変換する能力としてのみ、評価されるのである」(二二頁)、あるいは、「工業的畜産の経営者とその業界は、利益があがっているかぎり、自分がしている残虐行為を認めようとはしない」(二五頁)と紹介して、彼等の狂気にも似た驕り振りを次のように鋭い口調で糾弾する。

曰く、「彼ら(家畜)の屠体からより迅速により多くの金を儲けたい、ただそれだけのために、彼らの生きるよろこびのすべてを奪い去る権利が私たちにはあるのか。生きものを、ただもっぱら食肉変換機械として扱う権利があるのか」(二四頁)。

だが、忘れてならぬことは、量において圧倒的多数を占める消費者もまた、右の畜産工場、の生成・発展・拡大に大きく加担している事実であろう。

とまれ、現代工業化社会のバラダイムに呪縛されたファウステイアン・マンは、耕種、畜産、施設園芸の別なく、化学化と工業化とを「近代化」の名の下にひたすら追求し、結果、「農」が本源的に有した「生」の論理を脅かす危機的状況△シンドル

第1図 農業生産組織の変遷と事業経過〔海野〕



出所：海野亘「農業生産組織総合整備対策事業の概要」(『aff(農林省広報)』1977年11月), 37頁。

ムを招来せしめたのである。⁽³⁶⁾しかし、「適応」の農業生産共同化論は、この点に触れることをしない。

つまり、「適応」の農業生産共同化論にあつては、如何なる生産技術と雖も——たとえそれが生態系を破壊し、農地をその窮極において荒廃させ、あるいは、量産家畜に対する残酷性を有しようとも——それらは、静学および比較静学的意味における「与件」としてのみ認識され、その是非が問題にされることがない。何故なら、是非は倫理ないし価値判断の帰結であり、価値自由こそが科学的態度と信ずる方法論からは論理的に引き出し得ぬ性質のものだからである。それ故に、「適応」の農業生産共同化論にあつては、個別経営から共同経営への転形過程の経営・経済的分析、社会・歴史的分析だけが研究対象となっており、ここに再び「適応」の農業生産共同化論に通底する、部分均衡論的発想を見出すことができるのである。

すなわち、要約して言えば、第一図に見る如く、農業生産組織は与件変動適応的に、単なる集団栽培組織から今日の複合生産組織まで、多様な形態上の変化を見せて来た。しかし、その過半は現代工業化社会のパラダイムへの準拠という点において軌を同じうしており、「適応」

の農業生産共同化論にあつてもまた、これらに対して本節において示した視点からの検討を、少なくともわれわれの知る限りにおいて、一度も行ったことがなかったのである。

(四) 一般可能性定理

一九五一年(昭和二十六年)、K・アロウ(一九二一-)は『社会的選択と個人的評価』と題する一書を著わし、記号論理学の方法を用いて、「単に単純な多数決だけでなく、代表民主制その他の複雑な工夫をこらした投票による社会的決定方法も、すべて投票のパラドックスからまぬがれない」⁽³⁷⁾こと、換言すれば、以下に述べる公理系を前提とする限り、如何なる民主的手続きをもつてしても、社会的に合理的な厚生判断を導出することは不可能であることを証明した。

これは「アロウの一般可能性定理(General possibility theorem)」として、現代経済学のみならず、政治学や社会学の分野においても、社会的選択(決定)問題を取り扱う場合に避けては通れぬ重要な基礎理論の一つとして、広く認められている。⁽³⁸⁾一般可能性定理とは、具体的には、個人であれ社会であれ、選択肢に順序づけをした場合、その順序が常に弱順序⁽⁴⁰⁾(特に推移律)を満たすことを要求した上で、

○公理 I 個人選好の無制約性

すなわち、「個人の主義、信条、趣味などが完全に自由で、各個人は全く自分の好きな意見をもつてよい」というものであり、タブー(禁制)とか、特定の宗教的圧力、さらには、『常識』からも人間は自由でなければならぬとするもの⁽⁴¹⁾。

○公理 II 市民の主権性(パレート最適性)

すなわち、「もしも、社会の構成員のすべてが、『xはyより望ましい』という意見を表明したときは、社会的決定はこれに従わねばならないとするもの」⁽⁴²⁾。

○公理 III 無関係な選択対象からの独立性

すなわち、「二つの社会状態にかんする社会の選好関係は各個人のその二つの状態にかんする選好関係のみによって定まるべきであり、それ以外の社会状態についての個人の選好関係からは独立であるべき」とするもの⁽⁴³⁾。

○公理 IV 非独裁性

すなわち、「社会の構成員の中で、ただひとりの人物の選好順序が他の構成員の選好の如何にかかわらず常に社会的順序として採用されるということがあつてはならないとするもの」⁽⁴⁴⁾。

等、四つの公理系を、社会的決定が民主的であるための最低限必要な条件として提示し、「二人以上の構成員からなる社会が三つ以上の選択肢に關して社会的決定を行う場合、公理 I から

IVまでを満足させる決定方式は存在しない」こと、より正確に言えば、「(弱順序の下で)公理IからIIIまでから、IVの否定、『独裁性』(『独裁者』の存在)が導出できること」を証明したものである⁽¹⁵⁾。

つまり、推移律および公理IからIVのうち、少なくとも一つ以上が緩和されなければ、投票のパラドックスを回避することは論理的に不可能であることを証明したのである。

アロウのこの一般可能性定理は、現代経済学ならびに政治学や社会学に多大の波及的な影響を与えた。「何しろ、今までは当然のこととみなしていた民主主義の基本原則が、相互に矛盾することがわかってしまったのだから、このままにしておくわけにはいかない。条件を変えればよいのではないかと、既存の決定方式にはどういう矛盾が存在していたのかと、社会的決定におけるほんとうに民主的といえる原則は何であろうとかの様々な疑問が生まれてきた」⁽¹⁶⁾。

その最初のものは、推移律ないし公理系の条件緩和の発想であった。しかし、「民主的」であろうとする以上、市民の主権性(公理II)および非独裁性(公理IV)は絶対不可侵の「聖域」であらねばならない。従って、条件緩和が可能な公理系は自ずと制限される。

そこで、まず、個人の選好に対して何らかの社会的な規制を

課すことが考えられた。この場合、社会的な規制には、宗教的な戒律や規範、あるいは封建社会の階級的道德律のような上から下への強い規制から、民衆の自発的意志によるコミュニケーション過程を通じて形成される、価値観の共通化のような弱い規制までが包摂されている。そして、この時、多数決原理に準拠してなされた社会的決定は「投票のパラドックス」を生じさせないことが、A・K・センによって証明された⁽¹⁷⁾。

また、推移律は選好の首尾一貫性を要求する強い条件だが、それよりも弱い擬推移律、例えば「 γ ある選択肢 γ が他のすべてのものよりも良い」という判断に関して投票者全員が一致したときのみ、社会は、 $\gamma\gamma$ を最良のものとして選ぶべきである。そのような全員一致の推薦が得られるものがないならば、すべての選択肢は社会的に「無差別」として扱⁽¹⁸⁾う」というルールに従って社会的決定を行えば、「投票のパラドックス」が生じないことが、同じくA・K・センによって証明された⁽¹⁹⁾。

ただし、この方法には、佐伯胖氏による次の如き批判がある。曰く、「(しかし)考えてみると、常に満場一致を要求して、それが得られるまでは何回でも投票をやり直すというのは、投票者にきわめて非民主的な『圧力』を加えることになる。少数派の人々は自分の本心をいつわるようになり、たり、多数派の人々は少数派に対する暗黙の威圧をかけ、

意見修正をせまることにもなりかねないだろう」⁽⁵⁰⁾

と。だが、右の見解に対するわれわれの反論は、後節(二三)の(一)および(二)において間接的に紹介される。

その他、投票のバラドックス回避、つまりアロウの一般可能性定理の落とし穴からの脱出の試みが様々になされているが、ここでは以上の二仮説の紹介にとどめ、ひとまず次のように整理しておく。すなわち、

社会的決定理論の常識からすれば、組織(地域)構成員の間に何らかの価値観の共通化が図られるか、あるいは、全員一致の決定ルール(換言すれば、誰しもが拒否権を持つことを容認するルール)が採用されるのであれば、投票のバラドックスを回避することは論理的に不可能であり、従って、当該組織(地域)における多数決原理もしくはその他の民主的ルールに基づく社会的決定は、不可避免的に「疎外された個人もしくは集団」を生み出す。

この場合、彼もしくは彼等は、組織(地域)内に「不満分子」として沈黙し、叛逆の時を待つ。特に注(37)で例示されたケースのような場合には、その傾向が強い。つまり、分裂・攪乱要因そのものが組織(地域)にビルト・インされてしまうのである。

右の要約は、組織もしくは地域を考察の対象にする際に避け

て通れぬ、極めて重要な問題点を示唆していると考えられるが、管見にしてわれわれは、「適応」の農業生産共同化論がこれに對して言及した事実を知らない。

注(1) 沢辺・木下編(35)、三頁。

(2) 坂本慶一(31)、一六—一七頁。

(3) 右の諸事実の一端は、次に掲げる表および図によっても、容易に窺い知ることができる。

(4) 沢辺・木下編(35)、五頁。本書において永田恵十郎氏は、地域農業の組織化の目的と今日的意義を「農業生産の社会的諸契機である土地と水と人とを、生産力の現段階を踏まえた生産主体相互間の連結を基礎としながら、一つの面として地域的に再統合し、地域農業が持つ潜在的活力を自主的に引き出す」(一六頁)ところに求め、地域複合農業を「自主的に再編成された地域農業の持続的、安定的発展を支える生産力形成のための合法的な生産システムの形態」(二五頁)と周到に定義して、より具体的には、「個別経営の枠内だけで複合生産のメリットを追求するのではなく、一定の地域の中の個別経営同志が、土地利用、労働力利用、機械・施設利用、中間生産物利用などをめぐる補完、補合の関係を今日の生産力段階にそくして相互に取り結び、より高い複合生産のメリットを相互に追求するための組織的な仕組みのことである」(二四頁)と説明し

ているが、こういう視点に立つものを、われわれは「適応」の農業生産共同化論と呼び、本章において批判的に検討している。

(5) 『日本の農業生産組織』(26、三頁)によれば、農業生産組織についての統計上の定義は、『農業生産組織調査の手引』(農林省統計情報部、昭和四七年八月)において明らかにされたが、行政用語としては既に四一年の次官通達や四一年度「白書」に現われている、という。

(6) 沢辺・木下編(35)、一頁。

(7) 昭和四九年度「白書」には、本文中に次のような記述がなされている。「農村社会の混住化に対応して農業生産の維持増大を図っていくためには……地域農業の組織化を一層

注(3)-1 表 日本農業に関する基礎数字(全国)

年 次	昭和35	40	45	50*	備 考
①総 農 家 数 (1,000戸)	6,057	5,665	5,402	4,953	兼業化の深化
農 家 増 減 率(%)	—	△ 6.5	△ 4.6	△ 8.3	
専 業 農 家(%)	34.3	21.5	15.6	12.4	
第 1 種 兼 業(%)	33.6	36.7	33.6	25.4	
第 2 種 兼 業(%)	32.1	41.7	50.8	62.1	
②農 家 所 得 (1,000円)	409.5	760.8	1,393.2	3,414.4	改善されない米作中心の農業生産構造
農外所得の占める割合(%)	(45.0)	(52.0)	(63.5)	(66.4)	
③耕 地 面 積 ¹⁾ (1,000ha)	6,071	6,004	5,796	5,572	改善されない米作中心の農業生産構造
田 の 占 め る 割 合(%)	(55.7)	(56.5)	(58.9)	(56.9)	
④農業就業人口 ²⁾ (1,000人)	14,542	11,514	10,352	7,907	労働力の女性化 労働力の高齢化
女性 の 占 め る 割 合(%)	(58.8)	(60.4)	(61.2)	(62.4)	
60歳以上の占める割合 (男女計 %)		(22.0)	(26.8)	(31.6)	
⑤経営耕地規模別農家割合 (都府県 %)					改善されない零細経営
1.0ha 未 満	71.8	70.5	69.7	71.2	
1.0～2.0ha	24.1	24.7	24.5	22.3	
2.0ha 以 上	4.1	4.7	5.9	6.5	

資料：農林省『ポケット農林水産統計』。

注. 1) 各年8月1日現在 昭和48年以前は沖縄県を含まず。

2) 各年2月1日現在 昭和40年以前は沖縄県を含まず。

* 昭和45年度から稲作転換対策がはじまった。

促進する必要がある。その際、特に土地利用型の農業にあっては……地縁的な結合が重要であり、多数の兼業農家を包含しつつ、基幹男子農業専従者のいる農家を中核として、地域農業を組織化していくことが必要である」(傍点―足立、一三二頁)。

(8) 昭和五十一年度「白書」には、第一部第三章第四節に「農村社会の変ぼうと地域農業」が設けられ、大要、次の如き記述がなされている。「農村社会が変ぼうする中において農業は施設型農業の発展や機械・施設の共同利用等生産の組織化など地域の実情に即した対応をとりつつ地域農業を発展させ、地域社会の維持に重要な役割を果たしてきた。特に、地域社会の混住化等による村落共同体の機能低下に伴う農業生産環境の悪化の中で、土地の有効利用を図りつつ地域農業を維持発展させよううえで生産の組織化が大きな役割を果たしてきたし、この一層の促進は専門的農家の経営発展ばかりでなく地域の農業資源を有効に活用していくうえからも必要である」(一七二頁)。

(9) 玉野井芳郎「41」一九頁。
(10) 坂本慶一「32」三五一頁。

注(3)-2表 農業就業状態別農家の農業経営状況(昭和50年)

		経営面積 (ha)	耕作農家率 (%)	機械所有率 (%)	農作業 負担率 (%)	農家数 (%)	農地面積 (%)	安定的 賃労働率 (%)
① 専従者なし	補助者もいない	0.4	36.1	12.5	39.3	26.8	11.7	59.5
	女の補助者だけいる	0.5	48.4	19.1	34.6	10.4	6.6	62.4
	男の補助者がいる	0.8	70.3	36.5	23.0	18.7	18.0	45.2
② 専従者女子のみ	男の補助者がいない	0.7	60.3	22.5	30.7	6.9	6.0	65.6
	男の補助者がいる	1.0	81.3	38.8	17.8	5.5	6.7	49.3
③ 男子専従者がいる	男子専従者1人	65歳以上	0.8	69.1	30.2	21.8	4.2	53.5
		65歳未満	1.3	86.5	43.4	13.6	22.6	35.3
	男子専従者2人以上	65歳以上が いる	1.5	89.3	42.6	9.6	1.4	20.3
		65歳以上は いない	1.9	91.0	48.2	9.8	3.4	21.8
	計(平均)	0.8	63.3	29.2	26.0	100.0	100.0	49.4

出所：梶井功編著『1975年農業センサス分析——日本農業の構造——』。

注：専従者とは農業従事日数が年間150日以上のをいい、60～149日のものを補助者という。

- (11) 坂本慶一氏の一連の著作「31」「32」「33」等を参照のこと。
- (12) 綿谷起夫「46」、一七頁。
- (13) 農林省統計情報部『農業生産組織調査報告書』(昭和五一年七月調査)、五頁。
- (14) この調査の定義および分類上の問題点については、和田照男「農業生産組織の企業形態論的接近」(日本農業経営研究会『昭和五四年度春季研究集会報告要旨』)および吉田忠「50」を参照のこと。ただし本稿においては右の二者とは全く別の視点からの問題点の指摘が試みられている。
- (15) 宇都宮深志「43」、二四～二五頁。

注(3)-3表 穀物等輸入量の国際比較 (1975年)

(単位: 1,000トン)

	小麦	トウモロコシ	グリーンソルガム ¹⁾	穀物計 ²⁾	大豆	砂糖
アメリカ	17	45	7	407	... ³⁾	3,493
カナダ	0	773	— ⁴⁾	862	385	992
イギリス	3,630	3,029	171	7,860	754	2,346
西ドイツ	1,428	3,002	29	6,606	3,464	196
イタリア	1,613	4,499	16	7,060	1,217	674
フランス	433	531	26	1,295	416	400
ソ連	9,146	5,548	— ⁴⁾	16,655	349	3,240
中国	4,043	1,541	35	5,965	827	235
日本	5,654	7,470	3,520	18,855	3,334	2,466
世界農産物市場に占める日本のシェア (%)	(8.2)	(14.5)	(56.3)	(11.8)	(20.5)	(11.2)
世界計	68,606 (100)	51,477 (100)	6,247 (100)	159,195 (100)	16,259 (100)	21,973 (100)
生産量に占める貿易量のシェア (%)	[19.3]	[16.0]	[13.9]	[11.7]	[23.8]	[27.4]
(参考) 世界の生産量	355,172 [100]	322,536 [100]	44,851 [100]	1,359,202 [100]	68,356 [100]	80,060 [100]

資料: FAO, *Production Yearbook 1972* および *1975*.

FAO, *Trade Yearbook 1972* および *1975*.

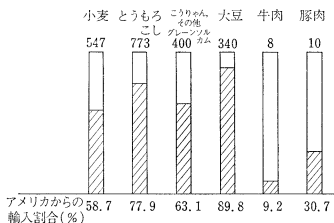
注. 1) 1972年の数字.

2) 穀物計は米, 小麦, 大麦, ライ麦, トウモロコシ, グリーンソルガム, その他の雑穀の合計.

3) 1 未満.

4) 不明.

注(3)の図 食糧輸入(昭和48～50年の3カ年平均)
(単位:万トン)



資料:通産省『通商白書』より計算。

- (16) 現代工業化社会のパラダイムを本文の如くに捉える発想については坂本慶一〔31〕〔33〕を参照のこと。なお、パラダイム(paradigm)概念は、アメリカの科学史家T・クーン(中山茂訳『科学革命の構造』、みすず書房、昭和四六年)によって流布された新しい概念だが、ここでは坂本氏にならって「時代を支配する価値観や諸制度の全体」という意味をこめて使用している。

- (17) 渡辺兵力〔45〕、七八～七九頁を参照。

- (18) 宮原幸則〔16〕、一九頁。

- (19) 綿谷氏〔46〕は農業生産の組織化を「生産要素の最適な結合を実現するために生産諸要素の投入主体を部分的ないし全部的に集団へ移行すること」と規定し、「そのさい移行の対象となる生産要素が労働だとすれば共同作業、労働手段だとすれば共同利用、経営管理機能だとすれば管理協定、以上の三つに加えて労働対象だとすれば共同経営というふうに、生産組織化の四つの基礎類型が登場する」(三二三～三二四頁)としており、組織を構成する農民の意識について触れることをしていない。

- (20) 綿谷起夫〔46〕、四頁。

- (21) 同右、五頁。

- (22) 同右、たとえば四五～四六頁を参照。

- (23) 例えば、佐々木隆〔34〕、和田照男〔44〕、吉田忠〔50〕等を参照のこと。

- (24) 宇都宮深志〔43〕、一三頁。

- (25) 『哲学事典』平凡社、昭和四六年)、一一七三頁。

- (26) 宮島番氏〔17〕は、功利主義的個人主義およびこれに対するデュルケムの態度について次のように述べている。「私的な欲求の充足をもっぱらその動機と行動原理とする、私利利害関心にたいしてのみ合理的な個人主義である。デュルケムは、これを、現実の産業社会

の人間の状況のうちに、またその秩序の正当化のイデオロギーである自由主義的経済理論の想定する個人像のうちに見いだしている。『功利主義的個人主義』 *dividualisme utilitaire* とよばれ、かれのなかで「貫して批判的に対象化されているものがこれである」(二二頁)。

(27) 宇都宮深志〔43〕、八九頁。

(28) ア・ゲ・ムイスリフチュニコ〔19〕、八五頁。

(29) 宮島喬〔17〕、二二五頁。

(30) E・デュルケム〔4〕、二二四頁。

(31) 宮島喬〔17〕、二二八頁。

(32) 宇都宮氏〔43〕はこの点を批判的に次のように指摘する。「クレーンのパラダイム概念を経済学的发展に適用すると、この世代を通じ実証経済学が経済学理論の支配的パラダイムを形成してきた事は明らかである。経済学者は、すべてわれこそは通常科学者だと自認し、基本的仮説(市場体制、経済的人間)とか実証的、没価値的、科学的手法などを理論的な拠り所として共有してきた。かくして経済学といえ、実証経済学を意味するようになり、それが、共通のパラダイムを築いてきたのである」(二四頁)。

(33) 坂本慶一〔31〕、一一頁。

(34) 昭和三七年に流行した植木等のスーダラ節の中に

《ノート》 農業生産共同化に関する覚え書

てくる「わかったやいるけど止められない」式の思考ならびに行動様式のこと、現代工業化社会が抱える諸問題の責任を常に第三者の所為にする事において特徴的である。

この点に関して、佐伯胖氏〔29〕は「例えば」人が『この社会は不平等が蔓延している』というとき、その不平等の責任の一端をほかならぬ自分も負っているとはふつう考えない。自分はあたかも第三者か社会評論家のような立場にあると錯覚してしまう。しかし、社会という抽象化されたものに不平等の責任をすべて転嫁してしまい、『要するに社会が悪い』といって逃げてしまうのは、やはり何らかのごまかしがあるように思える」(二七五頁)と、このようにわれわれがスーダラ節的思考と呼んだものの欺瞞性を指摘する。

(35) アニマル・マシーンは、R・ハリソン〔10〕が近代畜産業における量産家畜たちの悲劇的な実態を表現するために、怒りをこめて創出した用語である。

(36) 坂本慶一〔31〕〔33〕を参照のこと。

(37) 投票のパラドックスは、今日、社会的決定理論において自明のこととして扱われているが、馴染みのない方のために、佐伯胖〔29〕氏によって例示されたものを紹介しておく。

この例では、「最良のものからの順位づけの結果、

社会的に最も望ましいとされるもの」と、「最悪のものからの順位づけの結果、社会的に最も望ましくないとされるもの」とが共にエである、という矛盾が生じる。これは、「単記投票方式のパラドックス」として知られているものであり、こうした事態が現実に生起する確率は必ずしも小さくはない。

選好 順位	1	2	3
	1	2	3
選好者			
a	x	y	z
b	x	y	z
c	x	y	z
d	y	z	x
e	y	z	x
f	z	y	x
g	z	y	x

(38) 今井・字沢・他〔12〕、二五一頁。

(39) 「彼はこの定理によって、アメリカで最も名誉ある学会賞ジョン・ベーツ・クラーク・メダルを最年少記録で獲得し、さらに一九七二年度のノーベル経済学賞も授与された」(佐伯〔29〕、七一頁)。

(40) 「個人選好順序にしろ、社会的順序にしろ、次のような条件を満たす順序を弱順序という……」。

(1) 反射律 hVh

(2) 推移律 $hVh, hVh \rightarrow hVh$
(3) 連結律 hVh または hVh

……条件(1)は「同じ程度によい」……条件(2)は……選好順序が一本の直線上に位置づけられる……条件(3)はすべての選択肢がつねに相互に比較可能であることを意味する」(佐伯〔29〕、九五頁)。

(41) 佐伯〔29〕、六七頁。

(42) 同右、六七頁。

(43) 『経済学辞典』(第二版、岩波書店) 六二八頁。

(44) (45) 佐伯〔29〕、七〇頁。

(46) 同右、八〇頁。

(47) A・K・セン〔38〕参照。

(48) 佐伯〔29〕、九五頁。

(49) A・K・セン〔37〕参照。

(50) 佐伯〔29〕、九五頁。

(51) 佐伯〔29〕の「アロウ以降の社会的決定理論」(八〇～八二頁)参照。

二 パラダイム転換

(一) インヴォリューション

通常、インヴォリューション(involution)は紛糾、錯綜、あるいは退化(evolution)の反意語としての退化、退縮、等々、

様々に訳される。これを一つの新概念を表意する学術語として確立させたのは、アメリカの文化人類学者A・ゴールデンワイザー〔9〕であった。その後、C・ギアーツ〔8〕はインドネシアの農業構造分析に、A・ワイングロット〔47〕はサルディニア島（イタリア）における産業構造分析に、それぞれこの概念を適用した。

彼等の定義を参考にして、本稿ではこれを「隘路に直面した際に、パラダイム転換によってそれを超克することをせず、専ら与件ないし環境適応的であろうとする態度から生み出される畸形的進化もしくは過剰適応」と定義する。

インヴォリューションの典型的事例としては、先述した「穀物↓動物性蛋白質変換機械」を装備する近代畜産業を挙げることが出来る。そして、その略型性ないし異常性は、ヤマギシズム社会式養鶏法と比較する時、最も際立たせることができる。後に章を改めて紹介されるヤマギシカイでは、以下に示すような鶏の飼いが実践されている。

まず、鶏舎は、長さ一〇メートル、幅八メートルの木造平屋建て（南向き）を一棟として二五部屋に仕切られており、天窗（開閉式）より採光、前後二方を全面金網にした開放型で、通風ならびに陽当たりは極めて良好である。また、土間にはオ

ガクズ⁽²⁾が數十センチの厚さに敷き詰められており、鶏の習性によって断え間なく反転されて下方に沈んだ鶏糞は、土中の好気性バクテリアによって分解が促進される。従って、鶏糞は鶏舎内において既に微発酵状態にあり、手に取ってもサラサラと指間からこぼれ落ちる程に自然乾燥し、養鶏場に特有の悪臭も殆どない。そして完熟したオガクズ鶏糞は、そのままで、良質の有機質肥料となる。

つまり、ここでは鶏糞は悪臭源として忌諱すべきものではなく、むしろ貴重な有機質肥料供給源であり、しかもそれらを鶏自らが生産・加工し、供給してくれるのである。人は唯、一年に一度それを鶏舎内から取り出すだけでよく、有機質肥料を生産するための特別な労力は、全く必要とされない。——鶏舎内は「単なる鶏の棲息場所以上の高次の生きた生態系として機能し、……（鶏舎構造ならびにオガクズ床が）鶏と共存共栄の高次の環境を」⁽³⁾つくり出しているのである。

採卵鶏の場合、一部屋（三二平方メートル）に雌一〇〇〜一〇〇羽、雄五〜六羽が入れられており、生産される卵の九〇%以上は有精卵である。しかも、ヤマギシカイでは有精卵の生産そのものは目的ではない。群としての鶏社会の安定のためには、雌雄のバランスがとれていることが望ましい、とする発想が結果的に有精卵を生み出したと解すべきである。

また、群として安定した鶏社会には「つぎの順位(pecking order)」が確立し、ストレスや欲求不満からくる尻つつき防止のためのデ・ピーキングは、不要の残虐行為と見做されている。

更に、今日、通常の養鶏場では鶏の健康保全の目的で、罹病もしていないのに抗生物質や栄養剤等の多投与が常識化しているが、ここではそうしたものは使用されない。その代わり、平飼い鶏舎の中で、初生雛の頃より小米を与え、十分な運動をさせ、その他胃腸を丈夫にするための種々の工夫を凝らしたり、自家配合飼料の不十分さを補う意味から青草を毎日給餌している(ただし、当然のことながら、罹病の際には最少必要限の治療薬の投与、および法で定められた防疫措置は講じられる)。鶏への青草給餌は、今日では時代遅れの観さえあるが、ここでは卵に活力を与える意味でも、健康な鶏を育てる意味からも必須条件とされており、緑餌生産量の上限が鶏卵生産量の上限とさえなっている。つまり、ヤマギシズム社会式養鶏法では、鶏卵の生産計画は青草の栽培計画から始まる、とこのように言っても過言ではない。

右の養鶏法と、一の図において示した「近代的」と称される畜産工場、すなわち、

「身動きできないケージに入れられ、添加剤や抗生物質

の入った完全配合飼料で育てられ、人工照明のもとで生命としての固有のリズムは無視されて卵を産まされていく(鶏)。

「強制換気装置、自動給餌機、自動集卵機、自動排糞装置、あるいは化学薬剤による防疫体系といった環境調節技術が駆使され……糞尿公害への対応策として最近では脱臭鶏糞乾燥機も設けられる(工場)」(傍点一足立)

とを比較して、われわれは後者の中に、現代工業化社会のパラダイムに呪縛されたファウステイアン・マンの、化学屋と機械屋とインテグレーター(総合商社、スーパーストック、飼料資本)とに翻弄される哀れなインヴォリューションの姿を見ることが出来る。その他、牛乳や米の消費拡大キャンペーン(生産者サイド)、農産物輸入自由化論や「美観」主義的消費(消費者サイド)、米の生産調整や第Ⅱ種兼業農家対策に典型化される短見的部分均衡論的発想(行政サイド)、および「適応」の農業生産共同化論(研究者サイド)等々、インヴォリューションの事例は枚挙にいとまがない。

(二) パラダイム転換

現代工業化社会のパラダイムに固執する限り、不可避免的にインヴォリューションを招来し、これを超克するに「適応」の農

業生産共同化論をもってすることは、論理的に不可能であろうと、われわれは考える。

では、「適応」の農業生産共同化論に代替さるべき論理は何か。われわれは、次に、この設問に対して、何らかの提案をなさねばならない。以下、それを試みる。

渡辺兵力氏が共同（共働）には新しい人間Ⅱ共同経営的人を必要とする、と言及したことは前に述べた。最近では、小倉武一氏も——些か簡単に過ぎるくらいはあるが——共同精神に基づくと同志的結合および人間性の回復の必要性について触れている。われわれはこれを、次のように敷衍したい。すなわち——

プロテスタンティズムそのものは、近代資本主義社会を指向していたわけではなかったが、その倫理Ⅱ世俗内的禁欲・勤労・合理的生活態度（合理主義）が、資本主義の精神Ⅱ近代資本主義の成立に大きなインパクトを与えたことが一般に認められるところとなっている。⁽¹⁰⁾同様の意味において、ひとが共働の所作を通じて社会的連帯感を回復し、新しいコミュニティを創造する——共同（共働）の諸活動を通じて魂を交歓させ、自他の存在を相互に尊重しながら、共感・協和・協恭・協扶等々の歎びを感じ合える人間関係を創造する——ためには、現代工業化社会のパラダイムとは次元を異にする、新しいパラダイムが用意されなければ

ならない。

何故なら、これまで繰り返してきたように、現代工業化社会のパラダイムⅡ数量的合理主義・効率主義・生産力主義に呪縛されたファウステイアン・マンによって担われる「社会」は、それが如何なる名称をもって呼ばれようとも、その終局において、ひとをして自己を疎外せしめる危険性を内在させていると言わざるを得ないからである——と。

右の視点に類似する提案は、既に様々な人たちによつてもなされていく。

たとえば、先に紹介した「地域主義農業論」の主唱者、坂本慶一氏は次のように言う。

曰く、「ヘーゲルは各時代を貫くものは『理性』または『精神』であるとし、その展開の方向は『進歩』と『自由』であるとした。同様にしてマルクスは、歴史を貫通するものを『生産力』とし、その展開方向に『共産主義』を透視した。二人の大思想家にならって私は人類の歴史を人間的『生』の実現過程と見る。……私はヘーゲルが『自由の王国』を、マルクスが高度生産力社会とプロレタリアの解放を実現する『共産主義』を構想したように、人間的『生』の満面開花とそれを可能にする未来社会を夢想する。……（そ

して、この未来社会の実現のために）……まず、必要なことは、工業化社会のパラダイムにとらわれたわれわれ自身の価値観や行動を、われわれ自身の『生』の真の充足と開花のためにどう転換させるかである。そして、個人から家庭、さらに地域社会へと、この『生』という時代転換の軸を拡大・強化しつつ、これを回転させることである」(11)(傍点—足立)。

宇都宮深志氏は以下の如くに提案する。

曰く、「(パラダイム転換とは)現在のトレンドを逆転して未来モデルのあるべき姿に方向転換すること、すなわち、『競争型モデル』から『協力型(シェアリング)モデル』に軌道修正することを意味する」、つまり、「シェアリング社会は、競争のない社会かまたは、かくして競争が強調されない社会を志向する。……競争社会の基本的原理——競争、能率、機能的合理性、階層性、昇進、プロテスタント倫理、フロイト・スキナーの行動モデル——などが拒絶され、それに代わる新しい哲学、新しい社会的エトス、新しい行動、新しい態度、新しい生活スタイルと共に、きれいな空気と水、広大な原野など自然環境や敵対心のないオーゼンティシティ、愛、開放性などの人間的要素が重視される。……このモデルの根幹をなすものは、『共に働き』『共に

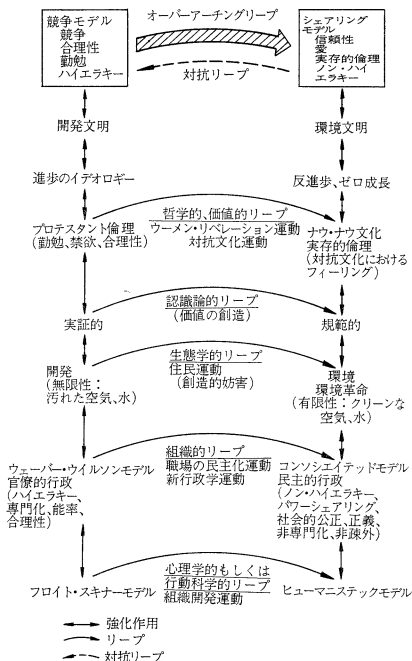
に生活し』『有限な資源をシェアする』いわゆるシェアリング哲学である」(13)。

そして、彼はこの提案を第二図の如くに模式化する。

他方、宮島喬氏はE・デュルケムの主張を次のように要約する。曰く、「デュルケムは『自由』な契約や交換はそれ自身では決して秩序形成的な原理とはなりえず、なんらかの非契約的な、非利害関係的な要素があつてこそ、はじめて真に規範的なものが成立しうると考えていた。……かれの好んだ“communité”という言葉は、『利害の共有』と意識的に区別された『精神の共有』(心が通じあうこと)を意味し、同時に、自発的な、volontaire 他者との交わりや規範への服従をも意味する。……すなわち、デュルケムのこの本源的な関心は、社会的分化がすすみ利害の多様化(対立さえも)が進行し、伝統的集合意識の存立の基盤をもちやもたない近代社会にあつても、その統合がかかるうじて維持されるためには、なんらかの共通の精神的、moral 紐帯が不可欠であることを確信させる、……それが、先に述べた契約・交換関係に還元されない『非契約的』な結合の要素にほかならない」(15)。

そして、E・F・シュマツハーは著書『人間復興の経済』において、「地球はすべての人間の必要を満たすに十分なものを

第2図 パラダイム転換〔宇都宮〕



出所: 宇都宮 [43], 155 頁.

提供するが、すべての人間の食欲を満たすほどのものは提供しない」というガンジーの主張（二四頁）、および「いかなる制度や機構の変革によっても、人間の性質の自己中心主義、食欲、けんか好きなど、社会的病気の原因を取り除くことができない

のは明らかである。……なしうるのは、人間が好みさえすれば、それに従って生きることができ、生活をあきらめない原則の上に社会秩序を作ることである」という R・H・タウニーの主張（一九八頁）を踏まえて、次のように言う。

曰く、「人間を紛争に駆り立てる力、すなわち食欲と妬みの組織的な助長に依存する経済的基盤の上に平和を築こうとすることは疑いもなく空想的である」(二八頁)。

曰く、「われわれはいかにして食欲と妬みの武装解除を始めることができるか。おそらくは、自分自身がもつと食欲と妬みを抑え、ぜいたく品を必需品にしようとする誘惑に抵抗し、必需品の簡素化と削減ができないかどうかを吟味することによって、それを始めることができる」(傍点―足立、二八頁)。

以上、右に紹介した四者の他にも、パラダイム転換の必要性を説く研究者は数多く存在する。

しかし、それは如何にして可能であらうか。われわれは次に、この設問に対するわれわれなりの見解を示さねばならないが、幸い次章において概説されるヤマギシズム、およびそれを実際に顕現する場(ところ)としてのヤマギシズム生活実験地の在り方は、これに対して充分に示唆的である。それはまた先にA・K・センによって提示されたK・アロウの一般可能性定理の落し穴からの脱出のための二仮説―すなわち、価値観の共通化と全員一致の決定ルール―を、既に現実に顕現させ、二十数年間の実践歴を有するという事実において驚異的である。

(1)

「過剰適応」という用語自体は、玉城哲氏〔40〕によって既に使用されている。彼はその典型事例として、工業の理論の農業への内部化、例えば、(1)穀物加工産業―鶏は卵の生産装置、(2)市場への適応の深化―農業の徹底した機械化と化学化、および、貨幣的所得に結びつかない労働投入は無駄なもの、という発想が帰結する労働報酬の低い農産物の生産放棄と兼業化の深化、(3)同じく、米過剰と食糧自給率低下現象の同時的発生、等々を指摘している。

(2)

ヤマギシズム社会式養鶏法は、水田(糠・屑米―飼料、敷藁供給)と畑(屑野菜・非可食部分―飼料供給)と鶏(有機質肥料供給)とをワン・セットにして、資源の永続的再生産・循環の利用を基本原理とする「農業養鶏」からスタートしたもので、敷材料としては稲藁が最適、次いで麦稈がよいとされている。

しかし、水田・畑・鶏のセット方式はいわば理想の形態であり、米の生産調整が強行されるなかで(つまり新規開田が困難)、今日、旺盛なヤマギシ有精卵需要に答えてゆくにはセット方式に固執するわけにもゆかず、不本意ながら、稲藁・麦稈の代用物としてオガクズが使用されている、というのが現状である。

また、「農業養鶏」は、単に技術を表わす用語だが、「ヤマギシズム社会式養鶏法」とは、一つの思想的立

場を表徴する。この点、特に注意を要するが、その理由については次章において明らかにされる。

(3) 古沢広祐〔7〕、三九頁。

(4) 『新榮養』誌調査班が有精卵表示の市販の五種類の卵を、東京都畜産試験場浅川分場孵化研究室に依頼して孵化実験をしたところ、ヤマガシ有精卵は有精卵率一〇〇%、孵化率八〇%という信じ難い数値を示したという（昭和五二年四月号）。

(5) 鶏の尻つきに関する「ザ・スモールホルダー」紙（一九六二年一月六日）の記事を、R・ハリソン〔10〕は次のように紹介している。

「ここ数年、羽根つきや尻つきがおそろしく増加している。これは飼育技術が変化して、採卵鶏および肥育鶏ともに完全に集約的管理に移行したためであることは間違いない。……尻つきが起ったときは、すぐに手を打って原因を探し——それはふつうなんらかの管理上の手落ちであるが——この癖を矯正しなければならぬ。……尻つきを生み出す管理上の手落ちとしてよくあるものをあげると、退屈、過密、悪い換気、低いとまり木、まる見えの産卵箱、貧弱な羽根、狭いエサ場、バランスを欠いたエサ、水の不足、害虫のまん延……等々である。ともあれニワトリは、ちゃんとした鶏舎に入れて適正なエサを与え、行き届いた

観察をしておれば、悪癖など起こるはずがないのである」（四七頁）。

(6) 私見では、ヤマガシカイの初生雛の扱い方には、昭和二〇年代後半に一時流行したミチュリン農法が少なからぬ影響を与えているように見える。

ミチュリン農法とは、本来、「接木の影響の下で有性交雑した実生苗を育成することによって、雑種植物にさらに新しい形質を導入し、より有効な品種を育成するメントル法（mentor method）^{*}」および榮養接近法を指すが、これと同時に、「秋播種の催芽種子を低温処理することによって春播種の性質をもつものに変える」ヤロビザーツィア（春化、通称ヤロビ）の方法が伝えられ、特に後者が流行した。今日では、ヤロビは低温要求性のない春播性禾穀類（イネ、トウモロコシ、ダイズ、等）に対しては効果がないことが知られるが、当時は、「ヤロビした稲は三〜七日間早く収穫出来、収量は二割増収となる^{**}」という報告さえ聞かれたのである。

それとはともかく、『山岸式養鶏学会報』創刊号（昭和二九年四月）には、次のような記述が見られる。——「鶏にもこの理論を応用して雛の寒冷飼育をする……寒ざらし雛は普通のものより大変元氣よくしまった頑丈な体が出来……山岸式養鶏法はこのような

理論に基き、雛を極度に溺愛するような従来のやり方と全く異なり、幼少の頃、既に小米の乾燥した堅いままのものを与え、菜類も一般養鶏家の軟かい物を与えているに反し、特に堅い禾本科の雑草を与える。之即ち幼少の時分から、胃腸を強健に発育させるためである」(一三頁、山本嘉兵衛稿)。

* 『体系農業百科事典』第Ⅱ巻(農政調査委員会)、一〇九頁。

* 『農学大事典』(養賢堂)、八八八頁。

* 『山岸式養鶏学会報』創刊号(昭和二九年四月)、一三頁。

(7) 古沢(7)、三七頁。

(8) 飯沼二郎(11)、六三頁。

(9) 小倉武一(27)、一四一～一五頁。

(10) 安藤英治編(2) 参照。

(11) 坂本(33)、二二一～二二三頁。

(12) 宇都宮(43)、一五三～一五四頁。

(13) 同右、二三四～二三五頁。

(14) 「利害を共通にする諸個人が互いに結合するとき、それはたんにこの利益を守り、敵対者の団結に抗してその増大を確保しようとするためばかりでなく、互いに結合する s'associer ためでもあり、仲間たちと共にいることだけでも生まれる喜びのため、もはや敵中

に孤立したと感じなくなる喜びのため、意志を通じて communier 喜びのため……でもある」(E・デュルケム(5)、五九頁)。

(15) 宮島(17)、二四一～二五頁。

三 ヤマギシズム社会の構造

(一) ヤマギシズム

ヤマギシズムとは、昭和二八年三月に京都府乙訓郡向日町において発足し、今日に至るヤマギシカイおよびシンパサイザーに通底する思想的態度を指す。「ヤマギシカイ会旨」には、「われ、ひと(人および陽土)と共に繁栄せん」をメイン・テーマとして、「その思い為すことが、果して終局において、自己を含めた社会の永遠の幸福・繁栄に資するものであるかどうかを検討し、一次的(自己一代、および自己の周囲のみの)目前の結果にとらわれないように、心しております」(1)と謳われており、多分に、修養会や宗教的なものの如くに誤解され易い一面を有している。が、ヤマギシズムでは、仏教であれ、キリスト教であれ、あるいは、マルクス主義であれ、知識や経験であれ、信仰し、本当はどうかと哲学する心を忘れた時、それらを総べて「宗教」と規定する。つまり、ヤマギシズムにおいては、何物かに囚われて頑なに譲らぬ「宗教」信仰的態度は、親愛の情あ

ふる和の社会に「反するもの」——前者から後者は生まれ得ぬ——として排除されるのである。⁽²⁾

しかし、「本当はどうかと哲学する」とは、具体的にはどういうことであろうか。

ヤマギシカイではそれを体認する場として、ヤマギシズム特別講習研鑽会（通称「特講」）とヤマギシズム研鑽学校⁽³⁾とを用意しているが、ヤマギシズムに造詣の深い学識者の幾人かは、特講の機能もしくはヤマギシズムを次のように分析する。

まず、鶴見俊輔氏は、ヤマギシズムについて、「日本の思想の非常に深いところから生まれてきたもののように思う。しかし、これを世界の思想史の脈絡の中に位置づけることは、すぐさま試みない方がよいようだ」と前置きしながら、「研鑽の方法は、ソクラテスの討論法にも似ているし、中共の洗脳にも似ており、理論体系の形なしの理論体系という点では老子、莊子に似ており、非暴力・平和的手段という点ではガンジーに似ている。技術を中心におく平和思想という点では墨子によく似ており、無限定の共同社会の理想を描く点ではゴドウィン、ギュイヨー、クロボトキン、リード、ブーパーらの無政府主義に似ており、またイスラエルのキブツに似ている。ガンジーにも近い。しかし、それらのどれかと置き換えて理解することはでき

ない。むしろ、日本の農村の中から自発的に育ってきたという点で、これまでの日本思想のつまさまの傾向を、善いにつけ、悪いにつけもつてであろうことを推定し、それらの傾向が、今後どうあらわれてゆくかを見て行くべきだ⁽⁴⁾」と、このように述べる。

草刈善造氏（元北海道教育大学教授、昭和三二年一月に第四六回特講を受講）は、特講の機能を次のように分析する。

曰く、「参加者一同が寝食を共にしながら、全く平等（世話係、進行係以外には特定の指導者も講師もいない）の立場で自由な話し合いを展開し、やがて親愛感から一体感へと高まりゆく研鑽の機能と様相とはC・ロジャーズの非指示的カウンセリング⁽⁵⁾や、それを集団化したグループ・カウンセリングがたどるラポート（親愛感）——解放——洞察（人格転換）の過程に酷似している。或は係の提示する課題について探求し、幼少時から心底に構築してきた固い防衛機制を突破して、人間存在そのものの基盤深くボーリングを試みるあたりは、V・フランクルのロゴセラピー（実存分析）にも通ずるものがある。

提案者（山岸氏）は『教えるよりも哲学的に現実的に真理と方法を探求しあつて』と研鑽資料の中で述べているが、在来、考える機会と方法に恵まれなかった庶民のための実

踐哲学とも、或は民衆のレベルにおけるソクラテス的方法などともいえる。私自身の第一印象では、K・レヴィンのグループ・ダイナミクスの日本版、二宮尊徳の報徳^⑥、辛こじ^⑦の現代版と映じた……。

他方、新島淳良氏（元早稲田大学教授、昭和四六年五月に第五七三回特講を受講）は、特講をフッサル^⑧のいう「現象学的エポケー」の方法を体認する場と捉え、特講受講後の感想を次のように披露する。

曰く、「政治的な立場がちがったり、氣質がちがったりする人の言うこと、言いたいことが素直にきけるようになった」。

曰く、「私が差別者であることが『見えて』きた、……『学者、知識人』という、知識を集める職についているだけの人間が、他の人よりエライ、と思う、鼻もならない態度が見えてきた」。

以上、右で紹介したものはほんの一例にすぎず、また、特講の捉え方にも各人に各様のものがあり、早計に集約を試みることは避けるのが賢明かも知れないが、特講第一日目のテーマⅡ「零位よりの理解を」に注目して、ここでは特講を、「自己を客体化し、科学し、触覚（体認）する場」と解釈しておく。

換言すれば、マルクスは、「五感の形成はいままでの全世界史の一つの労作である」^⑩と言ったが、われわれはマクロ的には政治・社会・経済環境、ミクロ的には知識・経験・信仰など、多様な歴史的、外的要因の規制下に「個人史」を形成する。そして、五感を統一する共通感覚の型は、そうした個人史の形成過程で徐々に定められていく。だが、その型が彼（または彼女）に固有の特殊なものとして、「宿主」に自覚的に知られることは極めて少ない。つまり、「私にとって或る対象の意味は……私の感覚の達するちょうどその範囲までしか及ばない」^⑪が、特講とは、その範囲（限界）を科学的に触覚する場、つまり、キメツケやトラワレから自己を解放する仕法を科学する場であり、同時に、それを体験知として触覚的に認識する場なのである。そして、次に、ヤマギシズムを以下の如くに理解しておく。つまり、自己を客体化し、科学し、触覚することを通じて他者と魂を交歓させ、「自分の考えを高しとして、他を裁き、批判、批評、非難する傲慢頑迷な態度」を除去して、共働の歓び、自他共活（共に活かす）の歓び、共感・協和・協恭・協扶の歓び等々が感じられる自分に、自己を変革することを目指す「哲学」——宇都宮氏の言葉を借りれば「シェリング哲学」——であり、物事を決定するに際しては全員一致を原則として、「本当はどうか、本当はどうありたいか」を零位に立って研

鎖し、一致点Ⅱ全員の納得が得られるまで根気強く話し合い、一致点が得られてもそれを「真」または「善」と早計に信じないで、しかし、今はその通りに実行する、無固定・前進の「実践哲学」である、と。

(二) 新しい共同化理念

ヤマギシカイでは、「共同化すれば個人経営に比して合理的な経営になる、共同生活すれば生活の無駄が省けると、『人』の問題を考えずに限らない人間の欲望に訴えて、その餌とも言ふべきもの、つまりモノとカネで組織したシステムは、その中で利害対立——例えば、利益分配や出役配分等の対立——で、或は人間関係の齟齬から何れは崩壊すること必至である。やはり、出発点からその自覚に立つこと、即ち、社会に生きる人間の在り方を追求する『哲学』から生み出されたシステムでなければ空虚である」と考え、また、構成員個々人も「新しいシステムⅡ共同体」を担うに足る資質を有する人間となるべく、すなわち自己の変革——渡辺兵力氏の表現を借りれば、共同経営的人——を目指して研鑽に励んでいるが、ヤマギシズムからすればこれは当然の帰結といえよう。

また、われわれが先に適応の農業生産共同化論として一括把握した、単なる共同（共働）においては、「人間と人間の協力、

それも特定の利害得失に局限された協力Ⅱラクをして儲けるための協力だけが関心の対象となり易いが、ヤマギシズムに於ては、単に人と人との関係に限られず、人と鶏、人と牛、人と豚、人と作物、人と太陽と水と土、等々、要するに森羅万象、ありと凡ゆるものとの共生Ⅱ不離一体の繋がりに関心を持つ世界観を有している⁽¹⁵⁾」のである（二の二）で既述のヤマギシズム社会式養鶏法を参照のこと）。

右の世界観は、また、次のように換言することも可能であろう。

E・フロムが指摘する如く、マルクスの社会主義観が「愛の欠如⁽¹⁶⁾にたいする、人間が人間を搾取することにたいする、また人間が自然にたいして搾取的であり、今日の大多数の人間、およびさらに将来の諸世代の犠牲においてわれわれの自然の資源を浪費することに對する抗議⁽¹⁷⁾」であり、かつ、マルクスの疎外されていない人間が、「自然を『支配』しない人間であり、自然と一体となつてゐる人間であり、対象が人間にとって生命となるように、対象にむかつて活動し応答するような人間である⁽¹⁸⁾」とするならば、マルクスの社会主義観ならびに疎外されない人間は、既にヤマギシズム生活実顕地において実現されている（されつつある）、と。

これは、また、ナシ栽培における全面協業経営で全国的に名

高い世羅幸水農園（広島県世羅町）、市民と農民の交流をモノ
の交流から人間的な交流にまで昇華させた産直活動で有名な下
郷農協（大分県耶馬溪町）、あるいは、「食」の在り方を根本的
に問い直し、「作り・運び・食べる」総合的な食生活革命を実
践する「たまごの会」、等々にも一部共通する世界観ではある
が、より完全な形でパラダイム転換を企図せんとする点におい
て、ヤマギシズム生活実顕地のそれは卓絶した徹底さを有して
いると言えよう。――勿論、一口にヤマギシスト（実顕地メ
ンバー）といっても、その中味は様々で、玉石混淆、深く研鑽
できる人も浅い人も渾然一体となっているのだが、しかし、研
鑽を深め、よき共同経営の人になろうとする心構えない姿勢
を有するという一事においては、全く同質であり、そこに所謂

「スーダラ節的思考（行動様式）」を見出すことは極めて困難
である。

（三）ヤマギシズム社会の仕事観（試論）

通常われわれは、仕事は面白くないもので、遊びは楽しく愉
快なもの、という風に仕事と遊びを峻別し、二分法的に考えて
いるが、ヤマギシズムでは、本来、仕事と遊びは対立する概念
であってはならない。つまり、仕事が面白くないのは疎外され
ている（もしくは疎外されていると感じる）からであり、他者

と魂を交感させる米が切れているからである。その解決、すな
わち自己の回復を、仕事および仕事の人間関係の中に求めず、
遊びという非生産的な、あるいは、社会に生きる人間の活動時
間の総体から見れば、極めて短い時間でしかない極小部分の中
において求めようとする姿勢は、生命の浪費である。

仕事そのものに歎きを見出せぬ心境、仕事を自己実現の場と
せぬ姿勢、仕事を「不効用」とし、賃金は不効用の耐忍料と見
做す思想的態度、労働時間――当該個人に天賦の、しかし不可
知の生命量の一部――を対価をもって切り売りする発想、等々、
これらはすべて「本当はどうか」「本当はどうありたいか」と
自らに動詞的リ知行合一的に問う哲学的態度（研鑽）の欠如、
すなわち、スーダラ節的思考（行動様式）に由来する、とヤマ
ギシストたちは考えているようである。

換言すれば、例えば、福田定良氏は著書『仕事哲学』の中
で、「私の能力を発揮しつづけることができるような（仕事の
面白さを感じつづけることができるような）持続的活動」、あ
るいは『私』がさまざまな能力の持ち主であることに気づか
されるような仕事を「私の仕事」と定義し、「職業や生業と
して携わる仕事」「させられている仕事」、あるいは「集団の一
員として携わり義務感という道德的な実感がつきまとい、面白
いという実感が希薄な仕事」を「自分の仕事」と定義して、

「自分の仕事」を「私の仕事」として見直す仕方を、話し合い、共感・共鳴し合える人間関係の創造の内に見出すことが出来るとしているが、ヤマギシズム社会Ⅱ実顕地は正しくそれを実顕しようとする。

ところで、通常、経済学（特に近代経済学）は仕事を「労働」と言い換え、「不効用」と定義する。しかし、何故に労働イコール不効用となるかについては、何程も説明されない。だが、この発想の背後には紛れもなく仕事と遊びの二分法が存在し、それは不可避免的にE・シュマツハー〔36〕によって批判的に指摘される、次のような労働（仕事）観を生み出す。

曰く、「雇用者の立場からみれば、それ（労働）はいずれにしてもコストの項目に属するものにすぎず、オートメーションによって、労働を完全に排除することはできなくとも、最少限度に減らすべきものである。働く人の立場からみれば、それは『非効用』である。働くことはその人のレジャーと楽しみを犠牲にすることであり、賃金はその犠牲の一種の代償なのである。したがって、雇用者の側からみれば、雇用なき生産が理想であり、被雇用者の側からみれば、雇用なき所得が理想である」（傍点―足立、四一頁）。

だが、仏教徒の仕事観はこれと好対照をなす。「仏教徒は：

…」とE・シュマツハーは続ける。

「仏教徒は仕事の機能について少なくとも三重の見解を示している。人間に才能を役立て、発展させる、チャンスを与えること、協同作業で他の人々と協力することによって利己心を克服せしめること、生存に必要な財とサービスを生み出すことの三つである。この見解から導き出される帰結もまた測り知れぬものがある。労働にとつて意味がなく、退屈で、ばからしく、神経を痛めつけるような形で仕事を組織することは犯罪行為とほとんど変わらない。それは人間よりも財により大きな関心を示し、この人間生存のもっとも初歩的な側面に同情心を欠き、魂を破壊するような悪徳行為であるということになろう。同様に仕事とは両立しないものとして、レジャーに懸命になることは、人間生存の基本的真理の一つを完全に誤解するものと考えられる。つまり、仕事とレジャーは、同じ生活の補足過程であり、仕事の楽しみとレジャーの喜びを打ち砕くことなしに、両者を切り離すことはできない」（傍点―足立、四一頁）。

また、機械化について、「仏教徒の見地からすれば、機械化には明確に区別すべき二つの型がある。一つは人間の技術と能力を高めるものであり、いま一つは人間の仕事を機械の奴隷に変え、人間を奴隷として奉仕せよとするものである」（四二

頁」と、彼は言う。

もし、仏教徒の仕事観ならびに機械化類型がE・シユマツハーの指摘通りだとすれば、ヤマギシズム社会における仕事観は大意において、仏教徒のそれに類似していると言ふことができる。しかし、詳細に検討すると、少なくとも次の二点において前者の仕事観は後者（仏教徒）のそれと大きく乖離する。

その第一は——E・シユマツハーの右の記述には明示されていなかったが——勤勉イコール美徳という発想がないことである。

確かに、ヤマギシストたちは寸暇を惜しむかのように、五、六時間の睡眠で、一日一二〜一四時間（平均）の長きにわたってよく働く。よく働くが、しかし、彼等は牛馬の如くに汗に塗れ、土に塗れて勤勉に仕事すること、それ自体を尊いこととも美徳とも考えてはいない。

キリスト教、特にプロテスタンティズムにおいては、生きる心の支えを神との契約に求め、神から賦与された能力を十全に出し尽す勤勉さが要求される。同じく仏教においても、鈴木正三（一五七九〜一六五五年）の「農業イコール仏行」、それ故に「かならず成仏をとげんと思人は、身心を賣て、楽欲する心有て、後生願人は、万劫を経るとも成仏すべからず。極寒極熱の辛苦の業をなし、鋤鋤鎌を用得て、煩惱の叢茂此身心を敵とな

し、すきかへし、かり取と、心を着てひた責に賣て耕作すべし。身に隙を得時は煩惱の叢増長す、辛苦の業をなし、身心を賣時は、此心に煩なし。……（中略）……（農業を勤者には、不覚功德、そなはれり」とする「勤勉の哲学」日本人の農業観・労働観・職業観の基礎Ⅱ日本的資本主義精神の基礎」の中に、勤勉イコール美徳の発想を見ることが出来る（傍点―足立）。

これに対して、ヤマギシズムでは、生きる心の支えを「ひと（人、陽土）と共に」の共働の所作を通じて、「愛児に樂園を」残すところに求める。ただし、その場合、今を犠牲にしないことが暗黙裏に諒解されている。つまり、仕事は愉しくなければならぬ（愉しいのが本当）のである。

望むと望まざるとに拘らず、当該個人に天賦・個有の、しかし不可知の生命時間は、時計の秒針の動きと共に刻一刻と減耗する。仕事はその一つの積極的な消費形態である。それに飲びを見出せず、創造的能力が発揮できず、労働過程において自己を実現（回復）できないのは、何処かに誤りがある。誤りの源泉は何か。それを零位に立つて、動詞的Ⅱ知行合一的に研鑽・究明し、「自己変革Ⅱ社会変革」に到る途を訊ねるのがヤマギシズムの行き方である。——「問題は働くか働かないかではなく、その労働が豊かなものであるか、貧しいものであるか、そこが問われる必要がある。……労働は生活の重要な一部であっ

て、労働が楽しくなければ生活も楽しくないだろうし、それは労働時間がどんなに短かくても同じこと……結果だけを求め、結果に左右される労働は貧しく、過程を楽しみ、そこから人間的豊かさを享受できる労働は豊かだと思う」(「けんさん」第一六一号)と、ヤマギシストの一人、吉田光男氏はいう。

第二の点は、ヤマギシズムには機械(技術)は人間の友か敵かと問う発想がないことである。

機械は飽くまでも機械であり、それ以上でも以下でもない。要は活用の仕方如何であり、友にもなれば人間を疎外する敵にもなる。ヤマギシズムには機械文明を拒否するアーミシユの発想はなく、この点に限ればフッターライトのそれに近いとも言えよう。⁽²²⁾

つまり、ヤマギシズムにおいては、機械の使用を否定して労働集約的に作業をすることや有機農業を行うこと、それ自体は目的ではない。目的は飽くまでも「ひとと共に」繁栄することであり、その基本理念を人間関係、教育、家庭、産業、政治などの凡ゆる局面にわたって応用実践することにある。手することが愉しく、仲間との共働に喜びが感じられる分野の仕事は、なるべく機械類を用いずに行うのがヤマギシズム社会の仕事の原則である。また、有機農業についても、初めからそれを「善」とし、その価値観に拘泥して、化学肥料や農業を「悪」と極め

付けて否定することはしない。

更に一点付け加えるならば、ヤマギシズム社会における仕事には対価(いわゆる賃金)がない。つまり、一切が無報酬なのである。日本資本主義社会の枠内に在りながら、パラダイム転換を企図して新興されたヤマギシズム社会においては、農事組合法人として登録されるヤマギシズム生活実顕地の経営余剰——すなわち、構成人が各々の能力に応分に仕事をした成果の集積——は、生活調、正機関という一つの財布に振り込まれ、必要とする者がそれが必要に応じて活用(消費)するという、そういうシステムが確立している。

こうした無報酬の仕事観は、W・モリスによって描かれたユートピアの住人たちのそれに似ている、と言ってもいいかも知れない。——ユートピアの住人の一人は次のように言う。「労働の報酬は生きることそのものでしょう。それで十分じゃありませんか」、「報酬はたっぷりありますよ、つまり、創造という報酬ですよ……神の得たもう賃金ですね⁽²³⁾」、と。

以上、われわれはヤマギシズムおよびその仕事観について、幾許かを知ることができた。しかし、その是非についての判断は、本稿では行わない。また、ヤマギシズムおよびその仕事観が一般化し得るものとも、すべきものとも言及することはしな

い。

唯、本稿においてわれわれは、混沌の時代＝農業・農村・農民疲弊の時代と巷間に言われる一般的状況の内にあつて、なお、ヤマギシズム生活実顕地においては、「混沌」の片鱗をすら見出すことが難しく、次節に示されるが如き目覚しい発展を遂げているという事実、およびその基底には、右に検討してきたパラダイム転換の一つの在り方としてのヤマギシズムが存在する事実、に注目をし、われわれの実顕地見学印象記を左に要約・紹介しておくにとどめたい。

此所、ヤマギシズム生活実顕地には、出稼ぎやそれに伴う家庭破壊の問題はない。後継者不足、嫁不足もない。老人問題や婦人問題もない。また、農業の工業化・化学化に伴う食糧汚染・量産家畜残酷物語・地力循環システムの破壊や、米や牛乳の生産調整に起因する農業意欲の減退の問題もない。あるのは唯一つ、老若男女相集い、それぞれの持ち味を互いに活かし合いながら、能力に応分に、嬉々として「農」に取り組む農人の姿——無我執、無所有、共同共活の社会を顕現せんとして研鑽に励む土の人の姿——である。

土の人は概して寡黙である。しかし、彼等は安定・着実な実践・実績を通じて、パラダイム転換ならびに転換後の

姿の一つを例示してくれているように、われわれには思える。

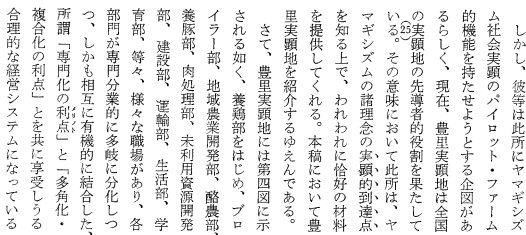
(四) ヤマギシズム社会の構造

a ヤマギシズム生活豊里実顕地の概要

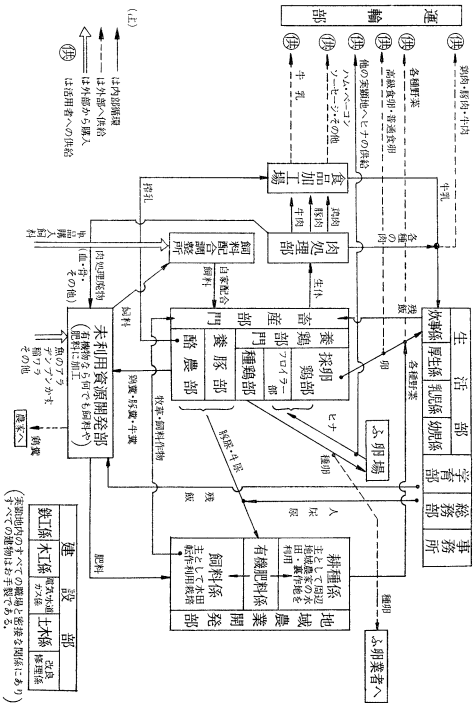
ヤマギシズムの諸理念を実際に顕現する場としての「実顕地」は、第三図に見る如く、昭和五四年一〇月現在、全国に三〇カ所ある。北は北海道根釧原野の別海実顕地から、南は九州長崎の西海実顕地まで一二都道府県にわたり、子供を含めて一三〇〇〜一四〇〇名が、酪農、養鶏（採卵鶏、種鶏、ブロイラー）、養豚、果樹（柑橘類、ブドウ、ナシ、リンゴ、クリ等）、耕種（稲作、園芸、飼料作物）等の農業を中核にして、その他、養蜂、建設、運輸、未利用資源開発、肉処理（屠畜、解体、精肉）、食品加工（パン、牛乳、各種肉製品）など幅広い活動を行っている。

その一つ、ヤマギシズム生活豊里実顕地は、三重県津市郊外、三重大学農学部付属実習農場に對面する小高い丘陵地に在り、現在（昭和五四年一〇月）乳幼児を含めて三五〇名前後の村勢を有するヤマギシカイ最大の实顕地である。ヤマギシカイの発足は昭和二八年三月だが、豊里実顕地の建設は昭和四四年六月と新しい。

凡例



第4図 ヤマギシズム生活豊里実顕地職場連関図(昭和54年10月現在)



(彼等はこれを、完全専門分業一体経営と称す。²⁶⁾)

また、三重県下には豊里実頭地を含めて八つの実頭地があり(第三図参照)、人的、物的、資金的等、あらゆる局面にわたって地域的にも相互に緊密な有機的連関を有する。さらに、酪農についてみれば、別海実頭地は豊里実頭地の育成牧場(養牛部)として、一部機能している。——われわれはこうしたヤマギシズム社会の農業経営体系を、例えば「広域補完・多重複合的・循環経営システム」なる新造語をもって称すべきかも知れない。

しかし、これは単なる経済合理主義や効率主義など、近代的と称される合理的農業経営システムへの追従から結果されたものではない。仮にこれが、近年農業界で注目を浴びている個別複合経営や地域的複合経営に、形態上如何に酷似しているようにとも、その内容において全く異質であることは、既に詳しく述べた通りである(三の(一)と(四)および注26を参照)。つまり、この「広域補完・多重複合的・循環経営システム」は、組織の構成員一人ひとりの自己変革——「われ独り」の繁栄を願う狭量さを廃して「ひと(人、陽土)と共に」繁栄せんとする宏量な価値観への変革、シェアリング哲学——が前提となり、そこから鶏や牛や豚の本来あるべき健全なライフ・サイクルを考え、土の生命をおもひ、職場内外の人と人との仕合せな在り方を考え

る「哲学」から生み出されたものであり、発想法自体がフアウステイアン・マンもしくは功利主義的個人主義者のそれとは根本的に異なる。

また、ヤマギシカイには指導者は無く、規則も罰則もない。権利も義務も責任もない。何時から何時まで働かねばならぬという不文律もない。個人を縛るものは何一つとして存在しない——つまり、ヤマギシズムでは、零位に立った研鑽の一致点において納得された、自発的な行動こそが最重要であり、肯定的戒命にせよ否定的戒命にせよ、法や規則によって人を縛らんとする発想は、親愛の情の溢るる社会からの乖離を帰結するインヴォリューションへの墮落だと考えるのである。それ故にこそ、第四図に示された精密・有機的なシステムが、予定調和的にさしたる躓きもなく、円滑に機能し得るのであらう。このことは、豊里実頭地生活部T・Kさんの言及の中において、その一端を窺い知ることができる。

曰く、『「一体」の繋りはどんな所からでも感じる事ができと思う。今日、^{美里と}豊里実頭地でトマトの苗の定植をさせてもらったが、耕種係の人から『軍手を嵌めないで、素手で苗を労わってやって欲しい』と言われて、すっごく嬉しかった。苗は苗でしかないが、そこにみんなの気持ちがある。苗は苗でしかないナと思つた。播種し、育苗する人の気

持ちを大切にする——『苗を労わる』とはそういうことだ
 と思った。

炊事係をさせてもらっていて、これまであまり深く考えることもなく、耕種係の人が届けてくれる野菜に包丁を入れていたが（もちろん、材料の生命を無駄なく活かしていることを考えて）、今日、炊事係としての私の仕事は、野菜に籠められたみんなの願いを確実に次へバトン・タッチしていくことだ、と認識を新たにしました。一個のトマトをつくるにも、実顕地の職場の総てが一体の関わりを持っている。私たち炊事係の仕事は、『生産する人を生産すること。みんなの願いを断ち切ることなく、如何に気持ちよく食事をしてもらえるか、そのことだけを考え、研鑽を深めていくことが、詰まるところ、実顕地全体が円滑に回ることになる』²⁷、と、熱と想った。

大要、右の如きものだったが、われわれには、耕種係の言葉を「嬉しい」と感じる彼女の鋭い感受性が眩しく感じられた。

人はトマトを育てたが、トマトはまた人を育てたのである。

b ヤマギシズム生活実顕地生産物の供給（新しい物流のシステム）

ヤマギシカイでは生産物を販売することを「供給」と称し、消費者を「活用者」と呼ぶ。昭和五四年一〇月現在、全国一八

カ所にヤマギシズム生活実顕地生産物供給所があり、そこから毎週、全国各地の約二〇〇〇の「活用者グループ」に実顕地生産物が供給される²⁷。一グループ平均二〇世帯、一世帯平均三、四人だから、全国で約四万世帯、一五万人前後が実顕地生産物を口にしていてる勘定になる。しかも、その数は日ごとに増加し、旺盛な生産の規模拡大（含、実顕地新設）にも拘わらず、常に大幅な超過需要が存在するといった状況にある。豊里実顕地の生産物も、三重県下は勿論のこと、遠く京阪神、東京方面にまで供給されている²⁸。

ここにいる「活用者グループ」とは、形態的には通常われわれが消費者グループと呼び馴れているものに類似しているが、その心情において全く質を異にする。一言でいえば、「活用者」とは、ヤマギシズム活動に賛同し、ヤマギシストたちと心意氣を同じうする実顕地生産物の受給者、村外協力者、とても規定できる存在である。

つまり、「供給」活動は、「楽しい気持ち、仲良し生活から生まれた食品、即ちヤマギシズム生活実顕地生産物を通じて、ひととひとの仲良しの繋がりを日本中、世界中につくっていく運動」²⁹ヤマギシズムに基づく、金のいらぬ仲良い楽しい村づくり運動であり、こうした彼等の真目的にとって、鶏肉、鶏卵、その他のモノの供給は寧ろ付随物——モノの介在は飽くま

でも過渡的手段——であって、最も重要なものは、心の供給である。それ故、彼等は、^{ぜいけん}現金をのみ媒介にした、心の通い合わない、単なるモノの遣り取りを意味する販売・購買という言葉で死語にし、そうした言葉からイメージされる生産者と消費者間の無機的な関係——A・マーシャル流にいうところの生産者余剰、消費者余剰を奪い合う関係——を、互いに真心の通い合える有機的な人間関係にまで高めたいという願いを籠めて、耳馴れぬ活用者という言葉を作り出したのである。

また、いわゆる産直方式とヤマギシズムの「供給方式」との相違について、若干の説明を加えれば、この場合も、形態的には一見同じように見えるが、本質的な違いは、前者が生産者と消費者が直結することで中間マージンを除去し、できるだけ安く、安全で新鮮なものを流通させる物的流通に主眼を置いているのに対して、後者の場合は、そうしたことは当然の諒解事項とした上で、更に進んで、モノに託された真心の授受・贈与という形にまで、人間的交流を昇華させんとする所に主眼が置かれている点にある。

彼等はいう、

「鶏から届けられた本物の卵（健康な鶏から産まれた卵）を、活用者に届けて喜んでもらいたい、という気持ちに支えられているからこそ、働くことが即ち喜びであり、いい

卵を産んでもらうよう鶏の心身両面の健康を考えた、心の行き届いた世話ができる。買ってやる、売ってやるという関係ではとてもやってゆけない。

誰の口に入るのか、飼育係個々人には知る由もないが、喜んで食べてくれる活用者の笑顔が、卵にオー・バー・ラップして、見えてくるからこそ、少しでもいい卵、安全で新鮮で美味しくて栄養価の高い本物の卵を供給したいと思う。だからこそ、仕事之余暇と同じく『正の効用』を与えてくれるものとなり、正しく『芸術家の心境』で、早朝から一日平均一二—四時間も仕事之余暇の区別なく、楽しい気持ちで、能力いっぱい働くことができる」

その結果、いま、生産者側は「もつと安く届けたい」といい、ヤマギシズムのよき理解者となり得た活用者側は「もつと高く活用したい」というまでに、相互の関係が深化している。例えば、栃木県にある大田原実顕地に建ち並ぶ鶏舎は、一部、活用者が自発的に参加して建設したものである。また、活用者グループによる実顕地見学ツアー、実顕地生活体験、作業実習、特講や研鑽学校への参加、夏休み子ども楽園村への子弟の参加、等々が盛んに行われ、近年では、単なる「活用者」としての立場に飽き足らず、みずから進んでヤマギシズム生活実顕地に

「参画」する人が少なからず現われている。

その他、ヤマギシズム生活実顕地生産物供給所のメンバーたちは、原則として、毎月一回定期的に活用者懇談会を開き、あるいは、ときおり活用者グループ間の拡大懇談会を開いて、ヤマギシズムならびに活用者相互の理解を深める努力を続けており、その結果、生協その他の消費者活動に屢々見うけられる当番出役の不平等や、些細い不満に端を発するグループ内部の人間関係の齟齬なども、見られることが少ない。

また、ヤマギシズム社会における生産物は、求められ、故に生産されるのであり、端境期の高値を狙う資源浪費的な農産物の栽培に典型化される、売らんがために生産される「商品」とは次元を異にする。⁽²⁹⁾ もう少し言うならば、近年、新聞・ラジオ・テレビ等のCMに頻繁に登場する「米や牛乳の消費拡大キャンペーン」などという、本末を転倒させたインヴェオリーションは、生産者⇌活用者間の強い心情的紐帯（一体感）を基礎にするヤマギシズム社会においては、絶対に起こりようのないものである。——こうしたヤマギシストたちの心境は、ふたたび、W・モリスによって描かれたユートピアの住人のそれに似ている、と言ってもいいかも知れない。⁽³⁰⁾

c 事業実績

右に見た、生産者⇌活用者間の強い心情的紐帯は何を結実さ

たか。ヤマギシズムの提案者、山岸巳代蔵氏⁽⁴⁸⁾は「目に見える部分よりも、形の無いものに本当の価値がある」（四二頁）と言及しており、これを是と同意するに吝かではないが、われわれは第3表に示された数字によっても、頭書の実態の一端を窺い知ることができると考え、参考資料としてここに示すことにした。ただし、数字の読み方に関しては、若干の注意を要する。

なお、厳密な分析に耐え得る社会学的、経営・経済学的データ類の集取については、現在、「経営⇌生活総合実態調査」（全国悉皆調査）が準備されつつある。

(1) 鶏飼養羽数について——採卵鶏、種鶏、ブロイラー合計で、昭和五〇年の四万七〇〇〇羽から、五三年の一二万四〇〇〇羽へと三年間で二・六倍（年平均増加率三七・八%）に増加した。しかし、採卵鶏については、活用者側の強い要望にも拘わらず、三重県下の養鶏業界の自主的生産調整の申し合わせに足並みを揃える必要上、二万二五〇〇羽（有精卵年間生産量二〇〇トン）に固定されている。

しかし、これはヤマギシカイにとっては全く不本意な事態であろう。何故なら、われわれの推計によれば、「ヤマギシ有精卵」に対する活用者需要量は、昭和五一年において既に調整供給力の一・三五倍に達し、五二年は二・〇倍、五三年に至って

第3表 ヤマガシズム生活豊里実頭地の事業概要¹⁾

事業種目	年次 単位	昭和 49年	50年	51年	52年	53年	
採卵鶏（月平均飼養羽数）	1,000羽		21.0	22.5	22.5	22.5	
（うち 育成中のもの）	♂		(5.5)	(5.5)	(5.5)	(5.5)	
種鶏（月平均飼養羽数）	♂		26.3	42.1	62.5	101.1	
（うち 育成中のもの）	♂		(10.3)	(14.5)	(30.3)	(41.2)	
ブロイラー（月平均飼養羽数）	♂	11.6	25.0	32.0	34.3	29.5	
有精卵年間生産量	トン		182.0	200.0	200.0	200.0	
ブロイラー年間出荷量	1,000羽	44.8	113.5	140.6	151.1	147.8	
母豚（月平均飼養頭数）	頭				19	125	
育成豚 肥育用（♂） 種豚用（♂） 授乳期（♂）	♂					408	
	♂					24	
	♂					408	
豚年間出荷量	頭					1,570	
搾乳牛（月平均飼養頭数）	頭				6	60	
育成牛（♂）	♂					9	
牛乳年間出荷量	トン					246.2	
年間事業高	農畜産物(加工品も含む ²⁾)	100万円	135.9	289.9	439.3	747.0	1,144.1
	運輸部門	♂			7.1	19.0	19.1
	建設部門	♂					110.1
	その他	♂	6.8	8.7	8.2	6.5	11.9
	計	♂	142.7	298.6	454.6	772.5	1,285.2

注: 1) 昭和49年9月、東京都町田市根岸町に「ヤマガシズム生活実頭地生産物多摩供給所」が開設され、実頭地生産物の自主「供給」がはじまった。

2) 農畜産物には、「活用户」への有精卵、鶏肉、豚肉、牛肉、牛乳、肉加工品、各種野菜等の「供給」の他に、ふ卵業者への種卵供給も含まれる。

は二・六五倍にも達しており、業界の申し合
わせさえなければ（先
述の如く、活用户は単
なる消費者とは違う）、
豊里実頭地では超過需
要量に対応して採卵鶏
を各々、三万羽、四万
五千羽、六万羽に増羽
するだけの潜在的飼養
能力を有していた、と
考えられるのである。
つまり、種鶏と採卵鶏
とはその飼育方法にお
いて同質であり、種鶏
から採卵鶏への置換は
極めて容易だからであ
る。

(2) 養豚について

——活用户側の強い希
望により豊里実頭地に

豚が導入されたのは、昭和五二年八月のことである。その後盛んに増頭が図られ、われわれが此所を何度目かに訪ねた昭和五三年七月には、種雄一六頭（ハンブシャー六、ランドレース三、デュロック二、原種豚二チャイナ・ジャパン五）、母豚二〇〇頭、子豚約一三〇〇頭の合計約一五〇〇頭を飼養していた。つまり第3表の数字は年間を月間に単純平均したものであり、特に飼養を開始して日が浅い場合は、平均値が当初規模に大きく影響される点を考慮する必要がある。

(3) 酪農について——この場合も養豚と同じことが言える。

参考までに、昭和五三年七月の乳牛飼養頭数は、搾乳牛九七頭、育成牛四五頭の、計一四二頭であった。

注(1) 山岸已代蔵口述・山岸会編(48)、九頁。

(2) 提案者山岸已代蔵氏(昭和三六年五月没、五九歳)は「宗教」がもたらす弊害について、「講義をそのままノットして、そのまま試験答案に出せば、優等生とされたり、有名人のきめつけた学説や理論体系を信仰読みして、それを高しとし、自分でもきめつけて、学識者を上級人かのように錯誤して、それ等を振回す、高慢畜学器的盲信自信人間を養成するの、宗教・信仰形態から来るものだと思う」(『ボロと水』第三号、四五頁)と指摘している。

* 山岸已代蔵氏と雖も、完全平等社会Ⅱヤマギシズ

ム生活突頭地のメンバーの一人であり、彼は唯、こういう新しい生き方を提案した人として認識されるにすぎない。従って、彼は代表者でも教祖でもない点、注意を要する。

(3) 特講とは所謂「講義」ではなく、進行係兼世話係と一般参加者が全く平等の立場で、『ヤマギシズム社会の実態』を資料にしながら、しかし、そこに書いてあることにも捉われずに、進行係が予め用意したテーマについて自由に語り合う一週間の合宿生活で、昭和三一年一月以来二十余年の歴史を持つ。現在は毎月一日よりと一五日よりの二回開かれており、総受講者数三〜四万人に達するのではないかと推定される。

他方、研鑽学校は、毎月一日よりと一六日よりの二回開かれている。特講と研鑽学校との最も大きな違いは、後者には作業(研鑽作業と称す)があり、ヤマギシカイに既に参画している者も、世話係を除いて生徒として参加していることにある。

ヤマギシカイではヤマギシズムを実際に顕現する場としての「実顕地」生活者になることを「参画」といい、通常一年に一度は研鑽学校に入学することが望ましい、とされている(特講は一生に一度しか受講できない)。思うに、参画者Ⅱヤマギシストにとって研鑽学校は、心の垢落しⅡ精神的人間ドックの機能を果た

しているようである。

(4) 鶴見俊輔〔42〕、一六頁。

(5) 非指示的カウンセリングについては、佐伯氏〔29〕による次のような説明がある。「ロジャーズのカウンセリング理論では、内的葛藤をかかえたクライエントに対し、特定の価値観にもとづく指示を一切ひかえて、カウンセラーは全く何の予見や価値観も持たぬ『無知』の状態に身を置き、ひたすら良き聴き役に徹するべきだというのである。クライエントは次々と自分の内面の諸問題を話すうちに、いろいろな欲求の相互矛盾に気づき、外界に対する認識の偏狭さや歪曲に自ら気づくようになる。カウンセラーは何の指示も与えずにただ聴いてあげるのだが、クライエントは安心して話せるという状況の中で、自己のかくれた欲求に気づき、矛盾に気づき、解決の方向づけを自ら発見するのである」〔一二七頁〕。

(6) 草刈善造・他〔13〕、五九～六〇頁。

(7) 新島淳良〔25〕、一八七頁。

(8) 新島淳良氏は昭和四八年一二月から約五年間、ヤマギズム生活実顕地メンバーとして活躍していたが、昭和五三年一月、実顕地生活の中に「社稷信仰」の存在を見たことを表向きの理由にヤマギシカイを脱退し、現在、ヤマギシカイおよびヤマギズム批判の急先鋒

となっている。

新島氏の見解に対しては、縁々に検討することも可能だが、それをいま、ここで開陳することは必ずしも妥当ではないので、別の機会に稿を改めて行いたい。

* 新島〔23〕、二六一頁。(その他、ヤマギシカイに関する著書には〔21〕〔22〕〔24〕〔25〕などがある。)

(9) 新島〔24〕、二八～二九頁。

(10) ヤマギズムでは「零位」を、「主観にとらわれないうで、きめつけないで、例えば地位、家柄、旧歴、名譽、学歴、知識、経験、感情(怒りも含めて)、思想、風習、道徳、社会常識の一切、信仰、財産、職業、家妻子、我、時間、生命等に執着する心を放ち(一応棚上げて)、零の身軽さに立って、物事を見、考え、究明(研鑽)理解する」ことと表現している。ただし、零とは空っぽということではなく、新島氏が指摘するように、「いままでの体系をいったん崩して、本当に考える」というフッサル^{*}の現象学的エポケー^{*}に通ずる認識方法であり、「イデオロギーの相対性^{*}」に気付くこと、と換言しても大過ないだろう。

「零位」はまた、次のように換言してもいいかも知れない。

『二宮翁夜話(巻之1)』に、「天理より見る時は普

悪はなし」(夜話二)、「見渡せば遠き近きはなかりけりおのれ」が往処にぞある」(夜話二六)という表現が見えるが、零位とは自己の判断基準それ自体を一時「棚上げ」して、右の真理に気づき、自己に個々の判断過程の「癖」を自覚することである、と。

*新島〔25〕、一八七頁。

*新島〔24〕、二一〇頁。

(11) K・マルクス〔15〕、一四〇頁。

(12) 中村雄二郎氏〔20〕は人間感覚の形成史を、聴覚優位のヨーロッパ中世世界——例えば、ルターは「耳、耳だけがハキリスト教徒の器官である」と言ったという——、視覚優位の近代社会(ルネサンス)、視覚独走の現代社会という図式で捉え、視覚の独走によって生み出された様々な弊害を除去するための方途として、ルソーは「視覚の性急さを触覚の鈍重ではあるが確実な知識によって抑制すること」、つまり、五感の組み替え——われわれの言葉で言えば、パラダイム転換——を必須のものと考えていたと指摘している(四八―六二頁)。

(13) K・マルクス〔15〕、一三九頁。

(14) ヤマギシカイではヤマギシズム研鑽学校を、「自分の考えを高しとし、他を裁き、批判、批評、非難する傲慢頑迷な人から、自分の考えも他の考えも間違い多

き人間の考えとし、反省し、反省して突っ張らない人になる科程である。即ち、自分の考えを正しいとし、或は他の誰かの考えを正しいと判断する物差しそのもの、謙虚に検べていく科学的な考え方・態度の人となつて、人間の知恵の本質を知った上で、人間の及ぶ限りの知性を働かせて研鑽していく人になる科程である」と位置づけている。

(15) 新島〔25〕、六四頁を敷衍した。

(16) これはオルダス・ハックスレーの「われわれの現在の経済的、社会的、国際的協力は大部分が愛の欠如に基礎を置いている」^{*}という認識が下敷きとなっている(E・フロム〔6〕、八七頁)。

* A. Huxley, *The Perennial Philosophy*, Harper & Brothers, New York, 1944, p. 93.

(17)(18) E・フロム〔6〕、八七頁。

(19) この点に関してヤマギシストたちは既に、興味深い文章を物している。すなわち、昭和四十六年に出版された『Z革命集団・山岸会』(山岸会文化科編、ルツタ社)には、次のような主張が見られる。「大人の仕事の中で、つらく、しんどく、不平不満が出たりしがちなのは何故か。それは何らかの事情で、今従事している仕事と、人類の幸福との関係が十分に理解できていないからであり、仕事に意味が見えないからであり、

従って自分が自分の体を動かしているのではなく、人によって動かされるか、人に対する思惑で働いているからである。……ポイントは真目的（注・自分を含めた人類の幸福実現）をはっきりつかむこと、その実現のために自他をもっとも活かす方法を考え合い、それを実行に移すこと。命令、押しつけのない自発性と協調によって、はじめて仕事が即遊びとなり、そのままで十分に楽しい、しかも確実に前進する毎日となるのではなからうか」（五七頁）。

(20) 山本七平「49」、六八頁および七四頁を参照のこと。

(21) ヤマギシズムには「欲しがりません勝つまでは」式の発想はない。

(22) フォーミッシュについては坂井信生「30」、フッターライトについてはV・ビーターズ「28」を参照のこと。

(23) W・モリス「18」、一七二頁。

(24) 足立「1」を参照のこと。ただし、昭和五五年一月に「新酪農村建設事業」東矢臼別地区へ移転することが決っている。

(25) 先導者の役割の「先導者」とは、軍隊および官僚社会に典型化されるヒエラルキー構造のそれではなく、パイロット（実験）としてのそれに近いものである。因に、酪農に関しては北海道別海実頭地が、子供の教育（ヤマギシズムでは学育という）の在り方について

は幸福学園阿山実頭地が、また、実頭地生産物の販売（ヤマギシズムでは供給という）については多摩供給所が、それぞれパイロット的機能を果たしている。

なおヤマギシズム社会には「移し（写し）行う」という言葉が定着している。その意味するところは、一つの実験（実績）の成果を他が移し行うことによって、水準の高いものを次々に継承し、全体のレベル・アップを図ろうとするものである。ただしパイロットの成果を他に押しつけたり、それに拘泥することはない。

(26) 零位に立った研鑽（話し合い）の一致点において納得された職務分担に、各人がそれぞれ他者の「身代わり」になって職務に専心し、あるいは、分担依頼側は被依頼者の職能に（自動解任期間〓六カ月間は）絶対の信頼をおき、完全に任せ切る、そういう相互信頼の心情的紐帯の上に成立する分業（職務分担）を、ヤマギシズムでは「完全」「専門」「分業」という。

他方、一体経営の一体とは、単に職場間の物的（つまり中間生産物）な有機的結合——例えば酪農と畑作との結合による「厩肥―飼料」循環——のみならず、経営体構成員が相互に心情的に「一体」の状態にあることを要求する。すなわち、彼等は「一体」の説明によくニギリメシとモチを直喻し、自らの在り方をモチの如しと称すが、その含意するところは、「ニギリメ

※ノート※ 農業生産共同化に関する覚え書

一一二

シは形は円くても米粒の一粒々々が孤立しており、水（Ⅱ外部条件の変化）に浸すとバラバラになってしまいが、モチは搗かれて（Ⅱ自己変革の過程、つまり研鑽を経て）自と他が一体化し、弾力性に富み（Ⅱ柔構造、無固定・前進）、水に浸されても最早バラバラになることはない」ということである。それ故、単なる共同もしくは「適応の共同化」とは、その目指す所において大きく乖離する。

(27) 参考までに昭和五四年五月一日現在の供給品目および価値は第4表の如くである。ただし、地域によっては生産量不足の故に、供給していないものもある。

(28) ただしヤマギシズムには「大量生産Ⅱ大量輸送Ⅱ大量消費」の構造を是とする、現代工業化社会のバラダームはない。われわれの見るところ、ヤマギシズムには本来、「分蜂の思想」とでも称すべき基本理念がある。今様に換言すれば適正規模論ないし「地場生産Ⅱ地場消費」ということになろうが、適正規模論では与件としての技術とコストという単なる経営収支面における「適正」が云々されるのに對しては、ヤマギシズムの「分蜂の思想」はむしろ、組織構成員相互の緊密なコミュニケーションの確立という人的側面における「適正」に焦点が当てられている。

つまり、一実顕地当たり三〇〇五〇戸を限度として

各地に集分れる「分蜂の思想」が、先に第三図で示したような実顕地群を生み出したとも考えられるのである。また、三〇〇五〇戸、成人の数にして一〇〇名前後の規模ならば、A・K・センによって提示された緊密なコミュニケーション過程を通じた価値観の共通化、および全員一致の決定ルールの貫徹によるK・アロウの一般可能性定理の落し穴からの脱出も、想像する程には困難な事ではないかも知れない。

(29) 現在、豊里実顕地では、鶏肉、豚肉、牛肉、牛乳、ハム、ベーコン、ソーセージ、各種野菜類、漬物、蜂蜜、等々、多種多様の農産物が生産されており、それに付随して作業時間も若干長くなりつつある。しかし、それは生産者Ⅱ活用者間の強い心情的紐帯の結果であり、一部で言われるような「高度資本主義経済に自給自足的コミュニケーション山岸会が席捲された結果」ではないと考えるべきである。表面的かつ常識的解釈に固執する限り、ヤマギシストたちの圧倒的多数が、一切無報酬であるにも拘わらず、心安らかに、一日に平均一二〜一四時間もの長きに亘って何故に働けるか、その真意は永久に理解し得ぬと言わなければならぬ。

* 例えば新島氏（『私の毛沢東』、野草社、昭和五四年）による次の指摘があるが、これも一つの観方なのであろう。

第4表 ヤマギシズム生活実頭地生産物一覧 (1979年5月現在)

品 目	単 位	価格(円)	供 給 期 間	備 考	
ヤマギシ 有 精 卵	10kg	4,500	1年中	毎週 30kg 以上を 原則	
ヤマギシ 牛 乳	1,000ml	230	〃	週 2 回12本以上配 送	
ヤマギシ 鶏 肉 (ブロイラ)	正 肉	500g	650	〃	14 2 2 2 } の生産割合
	サ サ ミ	250g	375	〃	
	セ セ リ	〃	220	〃	
	肝	〃	275	〃	
	砂 肝	5コ入	120	〃	}
	首 ガ ラ	7コ入	70	〃	
	手 羽 モ モ	手羽4本, モモ4本	約1,300/kg	〃	
	ブ ツ 切	500g	500	〃	
	腹 抜	1羽	約700	〃	
ミ ン チ	300g	250	〃		
ヤマギシ 豚 肉	ヒ レ	250g	600	〃	1 3 2 4 } の生産割合
	ロ ー ス	500g	1,000	〃	
	カタロース	〃	900	〃	
	上 モ モ	〃	950	〃	
	モ モ	〃	850	〃	4 3 1 } す ね 肉
	パ ラ	〃	650	〃	
	チ マ キ	〃	750	〃	
	ミ ン チ	300g	450	〃	
	レ バ ー	200g	290	〃	}
	ホルモン	〃	175	〃	
	豚スライス	500g	1,000	〃	
	ラ ード	300g	300	〃	
ロース, 上モモ, モモ混合					
ヤマギシ 酵母パン	2斤入	320	〃	週 2 回10本以上配 送	
ヤマギシ コンニャク	5丁入	450	11/1~ 2月末		
ヤマギシ 親牛肉	ステーキ用	500g	1,730	1年中	2 4 8 8 } の生産割合
	焼 肉 用	〃	1,400	〃	
	煮 込 用	〃	1,150	〃	
	ミ ン チ	300g	600	〃	

第4表 (つづき)

品 目	単 位	価格(円)	供 給 期 間	備 考		
ヤマギシ 食肉加工品	ロースハム	約700g	280/100g	1年中	受注生産	
	ボンレスハム	〃	〃	〃		
	ショルダーハム	〃	270/100g	〃		
	ベーコン	300g	660	〃		
	タンペーコン	1本	大 600 中 450 小 300	〃		
	ウィンナー	300g	390	〃		
	フランク	〃	〃	〃		
	焼豚	約300g	280/100g	〃		
鶏くんせい	1羽	約800	12/1～12/31			
ヤマギシ 果 物	みかん	15kg	変動適価	11/下旬～2/上旬	その他八朔・文旦・夏みかん	
	ぶどう		〃		} その都度通知	
	くり		〃			
ヤマギシ 野 菜	玉ネギ	ギモト	10kg	変動適価	5/13～	すべてのグループで活用 (春取りの大根・人参・キャベツを除く)
	ジャガイモ	15kg	〃	6/3～	6/15～8/中・下旬	
	トマタ	4kg	〃	7/6～8/上旬	6/1～6月末	
	スイカ	2ヶ入	〃	10/中旬～3/下旬	6/1～6/20	
	大根	10kg	〃	10/中旬～2/下旬	5/20～6/20	
	人参	5kg	〃	10/上旬～3/下旬	10/下旬	
	キャベツ	10kg	〃			ジャガイモはダンシヤク・メークイン両方ある
	白菜	15kg	〃			
	生しいたけ	元詰100g	〃	5/上旬～		野菜グループで活用 (春取りの大根・人参・キャベツも含む)
	ホウレンソウ	4kg	〃	9/下旬～6/中旬		
	タスリ	5kg	〃	5/10～6/10		
	ユウスリ	5kg	〃	5/下旬～7月末		
	キノコ	5kg	〃	6/中旬～8月末		
	ピーマン	2kg	〃	7/上旬～11月		
	里芋	5kg	〃	8/下旬～12月		
ヤマギシ ヤマギシ	金山寺みそ	1ビン	850		白菜・大根	
つけもの						
ヤマギシ 浄 菜	10kg	450	1年中	土を生きかえらせるヤマギシの肥料		

(W・モリス〔18〕、一八二頁)。

四 サルボダヤ・シユラマダナ運動

——結びにかえて——

「山岸会は……都市住民——みずからは食べものをつくらないでコミュニンに作らせようとする階級——の奴隷になりつつある。そのために、たとえば広大な面積の畑や田にみわたすかぎりキャベツをうえるとか稲をうえるとかいうことをはじめたし、その需要に応ずるためにコミュニン・メンバーが一日に十五時間も労働するということを余儀なくされている。内部では、この奴隷労働を管理するための監視制度(研鑽会とよばれる)が密になり、本人の意志を無視した人事配置がおこなわれている。農業にあとからあと機械が導入され、もともと工業的に経営されていた養鶏(飼料の大半は輸入である)とあいまって『近代的』企業としての性格を強めてきている。強力な都市住民の圧力(活用者という名の)は、わずかな年で、山岸会コミュニンを変色させるのに成功したのである」(二三二—二三三頁)。

(30) ユートピアの住人の一人は次のように言う。「われわれが造る品物は、必要だから造られるのです。人びとはあたかも自分自身のために造っているかのように、隣人たちに使ってもらうために物を造るのです。まったく何の知識もない、こちらの手の全然及ばない、正体不明の市場のために生産するものではありません」

《ノート》 農業生産共同化に関する覚え書

本稿において覚え書的に展開された農業生産共同化論は、モノ、カネ、管理者能力、等々が、どの程度にまで経済合理的に機能しているか、あるいは、機能させ得る際の隘路は何か等々、仕組みとしての組織の機能的側面に分析主眼が置かれることの多かった、従来の「適応」の農業生産共同化論の在り方に対して、分析すべきは「仕組み」そのものではなく、「仕組み」を支える構成員個々人の、あるいは組織構成員全体に通底する価値観や倫理規準でなければ空虚である、とする立場からの試論的考察であった。そして、その立論の具体事例として、ヤマギシズムおよびヤマギシズム生活実顕地が採用された。同様の意味において、われわれは結びにかえて、サルボダヤ・シユラマダナ運動を紹介しておきたい。

一九五〇年代から一九七〇年代の全般にわたる「モノとカネ偏重」の対発展途上国経済開発援助が、世界全体・三〇年間合計で恐らくは天文学的な巨額に達するにも拘わらず、渺々しい、見るべき成果があらがないことから、最近では「開発」の目標

が「経済」から「人」へと移されて、「開発教育」などという新語まで誕生し、徐々に市民権を得つつある。

サルボダヤ・シユラマダナ運動はこうした経済開発援助戦略の転調期において、近年とみに世界の関心を集めているものの一つである。ここに言うサルボダヤ・シユラマダナ運動とは、M・ガンジーの思潮を汲む、非暴力、無差別平等、互助互惠精神の高揚による人間ならびに社会の開発を目指す啓蒙的教育・実践活動で、

(1) 人は互いに一つの家族の如くにあるのが自然、という基本的認識

(2) 心理社会的下部構造 (psycho-social infrastructure) の確立、つまり、物質よりも精神面での「開発」を優先

(3) 共働的活動の実践を通ずる社会的連帯意識の触発とシエアリング哲学の普及

(4) 非官製の草の根の運動の展開

(5) 車座の自由な話し合い

(6) 変革序列は八個人↓家↓地域社会↓国家↓世界↓

等々を運動の基本理念に据えて、古く一九五八年から進められており、現在（一九七五年）ではスリランカの二万三〇〇〇の集落の約四％に当たる一〇〇〇集落において、既に実践されたか、もしくは実践計画中であるという。^①

この運動については、既にオランダのJ・P・ブロンク開発協力大臣が、「サルボダヤ精神は、発展途上国のみならず先進諸国においても、人々の様々な問題の解決に役立つものである」^②と高く評価しており、昭和五四年一月二十九日に国連などの主催によって東京で開かれた「開発教育シンポジウム」でも、ひとしきり話題になったと聞いている。

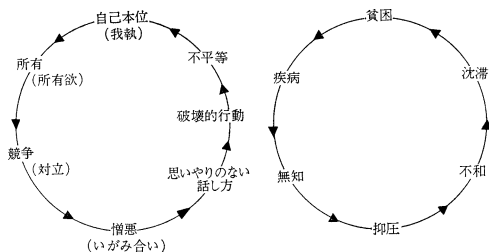
また、毛沢東主席および周恩来総理の二大巨星亡き後の中国では、九億七五〇〇万人民の精神的統一と結束を次代にわたって安定的に維持、継続させ、かつ農工商面における「開発」を推進させる戦略の一つとして、近年、サルボダヤ・シユラマダナ運動に強い関心を示しつつあるとも伝えられている。

第五図にサルボダヤ・シユラマダナ精神の概要が模式的に示されているが、これを一瞥しただけでも、ヤマギシズムに多少の知識を有する者ならば、恐らくは、そのあまりの酷似に驚きの念を禁じ得ないであろう。——時と所とを異にしながらも、現代工業化社会のパラダイムをその根底から剔抉、改革し、相互依存の社会に生きる「人としての在り方」を真摯に哲学する心から生まれるものは、枝葉の相違はあっても、大局において、一つ、方向に収斂して行くもののように思える。

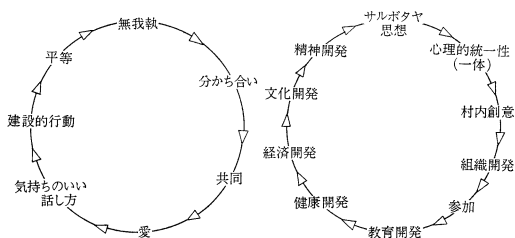
* サルボダヤ・シユラマダナ運動については、農業総合研究所海外部、水野正己氏より資料の提供を受けた。記

第5図 サルボダヤ・シュラマダナ精神の模式図

(A) 退廃的な村落→その原因



(B) 人づくり→その結果



出所：LJSSS [14], p. 15.

して謝意を表したい。

注(一) L.J.S.S. [14] 一四頁。

(2) 同右、七頁。

〔参 考 文 献〕

- [1] 足立燕一郎「ある開拓農民たちの記録——ヤマギシズム生活北海道別海実蹟地小史——」『研究季報』六一号、昭和五五年三月。
- [2] 安藤英治編『ウェーバー・プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(有斐閣新書、昭和五二年)。
- [3] K・アロウ、長名寛明訳『社会的選択と個人的評価』(日本経済新聞社、昭和五二年)。
- [4] E・デュルケム、宮島喬訳『自殺論——社会学的研究——』(世界の名著47、中央公論社、昭和四三年)。
- [5] E・デュルケム、宮島喬・川喜多喬訳『社会学講義』(みすず書房、昭和四九年)。
- [6] E・フロム、樺俊雄・石川康子訳『マルクスの人間観』(合同出版、昭和四五年)。
- [7] 古沢広祐「有機農業の技術論・試論」(『技術と人間』昭和五五年三月号)。
- [8] C. Geertz, *Agricultural Involution*, Berkeley: University of California Press, 1963.
- [9] A. Goldenweiser, "Loose Ends of a Theory on the individual Pattern and Involution in Primitive Society", in R. Lowie ed., *Essays in Anthropology*, Presented to A. L. Kroeber, Berkeley; University of California Press, 1936.
- [10] R・ハリソン、橋本明子・山本貞夫・三浦和彦共訳『アニマル・マシーン——近代畜産にみる悲劇の主役たち——』(講談社、昭和五四年)。
- [11] 飯沼二郎「湊徹郎『農業基本政策私論』批判」(『農業と経済』第四三巻第五号、昭和五三年五月、五六～六四頁)。
- [12] 今井賢一・宇沢弘文・他『価格理論Ⅱ』(岩波書店、昭和四六年)。
- [13] 草刈善造・手塚信吉『日本の共同体』(東京都、日本協同体協会、昭和四四年一〇月)。
- [14] Lanka Jatiya Sarvodaya Shramadana Sangamaya, *Ethos & Work Plan*, Sri Lanka, 1978.
- [15] K・マルクス、城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』(岩波文庫、昭和三九年)。
- [16] 宮原幸則「農業生産共同化の類型的把握の試み」(『農業と経済』第二六巻第三号、昭和五五年三月、一八～二三頁)。

[17] 宮島喬『デュルケム社会学理論の研究』（東京大学出版会、昭和五二年）。

[18] W・モリス、松村達雄訳『ユートピアだより』（岩波文庫、昭和四三年）。

[19] ア・ゲ・ムイスリフチェンコ、岩崎允胤訳『マルクス主義の人間概念』（大月書店、昭和五二年）。

[20] 中村雄二郎『共通感覚論——知の組みかえのために——』（岩波現代選書、昭和五四年）。

[21] 新島淳良『新人類のための育児学ノート』（風媒社、昭和五一年）。

[22] 新島淳良『ヤマギシズム幸福学園——ユートピアをめざすコミュニオン——』（本郷出版社、昭和五二年）。

[23] 新島淳良『子どもを救え』（野草社、昭和五三年）。

[24] 新島淳良『阿Qのユートピア——あるコミュニオンの暦——』（晶文社、昭和五三年）。

[25] 新島淳良『さらばコミュニオン——ある愛の記録——』（現代書林、昭和五四年）。

[26] 農業生産組織研究会編『日本の農業生産組織』（農林統計協会、昭和五五年）。

[27] 小倉武一『集団営農の発展のために』（小倉武一編著『集団営農の展開——新しい農業の生産組織のために——』、

御茶の水書房、昭和五一年、三二—三三頁）。

[28] V. Peters, *All Things Common, The Hutterian Way of Life*, University of Minnesota Press, 1967.

[29] 佐伯胖『きめ方』の論理——社会的決定理論への招待——』（東京大学出版会、昭和五五年）。

[30] 坂井信生『アーミッシュの文化と社会——機械文明に背を向けるアメリカ人——』（ヨルダン社、昭和四八年）。

[31] 坂本慶一『日本農業の再生』（中央公論社、昭和五二年）。

[32] 坂本慶一『農政の転換と農業再生の条件』（柏祐賢・坂本慶一編著『戦後農政の再検討——基本法農政の理念と現実——』、ミネルヴァ書房、昭和五三年、三三二—三五七頁）。

[33] 坂本慶一『日本農業の転換』（ミネルヴァ書房、昭和五五年）。

[34] 佐々木隆『生産組織における経営体的性格の形成について——生産組織分析への一視角——』（『農林業問題研究』第一三巻第四号、昭和五二年一月）。

[35] 沢辺恵外雄・木下幸孝編『地域複合農業の構造と展開』（農林統計協会、昭和五四年）。

[36] E・F・シュマッハー、斎藤志郎訳『人間復興の経済』（佑学社、昭和五一年）。

- [37] A. K. Sen, "Quasi-Transitivity, Rational Choice and Collective Decisions", *Review of Economic Studies*, Vol. 36, 1969, pp. 381-394.
- [38] A. K. Sen, *Collective Choice and Social Welfare*, San Francisco: Holden-Day, 1970.
- [39] 高松修『石油タンパクに未来はあるか——食と土からの発想——』（續文社、昭和五五年）。
- [40] 玉城哲『むら社会と現代』（毎日新聞社、昭和五三年）。
- [41] 玉野井芳郎『地域主義の思想』（農山漁村文化協会、昭和五四年）。
- [42] 鶴見俊輔「けっしておこらない人たち——ヤマギシカイ訪問記——」（『思想の科学』三九号、昭和三七年六月、二一六頁）。
- [43] 宇都宮深志『開発と環境の政治学』（東海大学出版会、昭和五一年）。
- [44] 和田照男「農業生産組織の企業形態論的接近」（日本農業経営研究会『昭和五四年度春季研究集会報告要旨』）。
- [45] 渡辺兵力「農業共同化の諸問題」（日本農業研究所編『農業共同化論』、共同出版社、昭和五五年、七五—一二三頁）。
- [46] 綿谷超夫『農業生産組織論』（綿谷超夫著作集第三卷、農林統計協会、昭和五四年）。
- [47] A. Weingrod, "Industrial Involvement in Sardinia", *Sociologia Ruralis*, Vol. XIX, No. 4, 1979, pp. 246-266.
- [48] 山岸巳代蔵口述・山岸会編『ヤマギシズム社会の実態』（非売品、昭和四九年版、初版昭和二九年）。
- [49] 山本七平『勤勉の哲学——日本人を動かす原理——』（PHP研究所、昭和五四年）。
- [50] 吉田忠「農業経営と生産組織」（上村恵一・山内豊二共編『現代日本の農業経営』、富民協会、昭和五五年）。